

大谷大学 自己点検・評価報告書
2017年度

真宗学科

仏教学科

哲学科

社会学科

歴史学科

文学科

国際文化学科

人文情報学科

教育・心理学科

<自己評定> A	<相互評定> A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
読む力・考える力・書く力の向上に向けた、演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳにおける指導の充実。	
[達成基準]	
「行動計画」が全て実施できた時に達成とする。	
[行動計画]	
<p>演習Ⅰにおいては、親鸞の生涯と基本的な思想を学ぶ中で、読み書き能力の向上に向けた以下の取り組みを実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○様々なレポート課題を通して聞く力、考える力、内容をまとめる力、自らの考えを表現する力を養う。 <ul style="list-style-type: none"> ・5月、親鸞ゆかりの旧跡を訪ね、調べたことと訪れての感想をレポートにして提出させる。 ・5月、新入生歓迎講演会を実施する。感想をレポートにして提出させる。 ・各クラス指導教員間で、レポートの内容を確認し、学生指導に活用する。 ○前期後期の期末テストでは論述問題を中心に出題し、読み・考え・書く力を養うように意識させる。 ○後期初めに、前期末テストの答案を返却し、前期の学びを振り返る機会にする。 ○適宜、授業時に小レポートを課し、添削の上返却し、次回授業時に振り返りの材料として活用する。 	
<p>演習Ⅱにおいては、『歎異抄』を読解することを通して、読み書き能力の向上に向けた以下の取り組みを実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○テキスト読解に必要な漢和辞典・古語辞典の活用法、仏教関係の辞書の活用法を随時、指導する。 ○前後期末のテストでは、論述問題を課し、読み・考え・書く力を養うように意識させる。 ○レポート課題を通して聞く力、考える力、内容をまとめる力、自らの考えを表現する力を養う。 <ul style="list-style-type: none"> ・夏期休暇中の課題を受けて、後期初めの授業時にレポートを提出させる。指導教員はレポートを読み、コメントを付して学生に返却する。 ○比叡山フィールドワーク <p>学習意欲の向上を願いとし、2012年度以降実施してきた比叡山登山フィールドワーク（法然・親鸞の足跡を巡る）は、その効果が認められるので、2017年度も引き続いて実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事前学習を行う。 ・登山後に感想レポートを課す。 ・各クラスの指導教員は感想レポートの提出状況を相互に確認し、登山・諸堂巡りや感想レポートを通して知り得た学生に関する情報を共有し、担当クラスだけでなく、第2学年の学生全体の指導に責任をもって当たるようにする。 	
<p>演習Ⅲにおいては、以下の取り組みを実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○卒業論文提出までの2年間を見通して、学生が各自の課題に基づいて学びを進められるように指導をする。 <ul style="list-style-type: none"> ・第2学年までの学習経過を把握するために、演習Ⅰ・Ⅱ担当教員とゼミ指導教員との連絡会を行う。 ・第3学年の当初に、今後の取り組みについて面談指導を実施する。 ・オフィスアワーやゼミ懇談会を利用して、学生の状況を把握するように努める。 	

- ・以上の内容については、学科会議において、学科全体で共有する。
- ゼミにおける発表・討論を基本として、読み書き能力の向上に向けた以下の取り組みを実施する。
- ・前期中にゼミに関わるテーマから課題を取り上げ、レポートを作成し提出させる。
 - ・夏期休暇中には、課題図書を設定し、レポートを作成。
 - ・後期中にゼミに関わるテーマから課題を取り上げ、レポートを作成し提出させる。
 - ・春期休暇中には、各自の研究課題に基づいて、レポートを作成。卒業論文に向けての課題を明確にする。

演習Ⅳにおいては、以下の取り組みを実施する。

- 第4学年は卒業論文を提出する学年であるので、学生が各自の課題に基づいて卒業論文を書き進めることができるように指導する。
- ・学生が春期休暇中に各自の研究課題に基づいて作成したレポートに基づいた面談指導を実施する。
 - ・オフィスアワーやゼミ懇談会を利用して、学生の卒論への取り組みの状況を把握するように努める。
 - ・6月末日の卒業論文題目提出に向けた面談指導を行う。
 - ・夏期休暇中に卒業論文に関わるレポートを作成させる。
 - ・夏期休暇中に作成したレポートにもとづき面談指導を行い、ゼミにおいて各自の卒業論文の概要について発表させる。
 - ・12月初旬にすべての第4学年の学生が参加する卒業論文中間発表会を開催する。
 - ・口述試問に向けての指導を行う。
 - ・卒業論文と口述試問を通して学んだことをレポートにして提出させ、成果を確かめる。
- ・上記の内容を会議において学科全体にも周知する。

2. 【2017年度の達成状況報告】

演習Ⅰについて

○行動計画は全クラス共通して全て実施できた。各行事の詳細は以下の通り。

- ・新入生歓迎講演会の実施について

日時：5月23日（火）13:00~14:30（2201教室）

講師：三木彰円氏（大谷大学教授）

講題：「真宗の学び」

演習Ⅱについて

○行動計画は全クラス共通しておおむね実施できたが、10月29日（日）に実施を予定していた比叡山フィールドワーク（親鸞の足跡を巡る）は、台風による荒天のため、中止した。

○行動計画には記していないが、現代臨床コースの学生を対象とし、フィールドワーク「ターミナルケアの現場を尋ねる」を実施した。2017年度学長裁量経費による教育改革事業として実施したものである。詳細は以下の通り。

11月28日（火）12時、真宗本廟（東本願寺）阿弥陀堂門前に集合し、JRで京都駅から山城青谷駅へ移動。徒歩15分程度で「あそかビハラー病院」に到着。2時間半の研修で、大嶋健三郎氏（あそかビハラー病院長）と山本成樹氏（ビハラー室室長）による講義を聞き、病院施設を見学した。16時研修終了。JRで山城青谷駅から京都駅に移動し解散した。翌29日（水）の真宗学演習Ⅱの授業にて、意見交換会を実施。その内容を踏まえて、1200字程度のレポートを提出させた。学生のレポートは「報告書」として冊子にし、参加した学生及び、学科教員と2018年度の現代臨床コース2回生に配付予定（2017年度末刊行予定）。

○演習Ⅰ・演習Ⅱとも、レポートの内容については、指導教員が他クラスのものも共有し、学生指導に活用できた。

演習Ⅲについて

○演習Ⅲの計画はほぼ達成できた。ただ、5つのゼミによってゼミ学習の進め方や課題の出し方、また指導方法には違いがある。

演習Ⅳについて

○演習Ⅳの計画については、ほぼ達成できた。特に卒業論文の指導については、きめ細やかな指導体制をとった。また提出後の口述試問後のレポートについても、本人が振り返るための良い機会になった。

○上記の内容を会議において学科全体にも周知した。

3. 【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

演習Ⅰ・演習Ⅱとも、文章能力の向上を意識して様々なレポート課題や期末テストにおける論述問題を課したが、学生の文章能力が向上していることを教員間で確認した。また、授業時の小レポートを次回授業時にフィードバックしたり、前期末テストの答案を添削の上、返却したりすることによって、学びを振り返る機会を与えることができた。演習Ⅲ、演習Ⅳでは様々な機会のレポート課題を通して学生の文章表現能力の向上を確認することができた。

各クラスの指導教員間で、学生の状況を共有することができた。【根拠資料】 1、2

第2学年の学生に対して、2017年度はコースごとに夏期休暇中の課題を課した。思想探究コースは、真宗ゆかりの史跡のフィールドワークとレポート、現代臨床コースと国際コースはそれぞれのコースの学びに則した読書感想文である。学生のレポートからは、コース独自の視点から親鸞思想を学ぶことの意義が確かめられているように思われた。各コースでの課題を意識し、学びを深めていく上で効果があったと思われる。【根拠資料】 3

第2学年の現代臨床コースフィールドワークについては、学生一人ひとりが多くの課題をもらう機会となったようである。レポートからは、参加した学生がターミナルケアの現場から何を問われ、また何を感じ、学んだかを確認することができた。【根拠資料】 4

第3学年の学生の様子について、学科会議で共有し、2016年度の担当教員との連絡を密にすることにより、指導の体制を整えることができた。【根拠資料】 5

第4学年に関しては、一夜研などを催すことにより、卒業論文の内容を考える時間をもつことができた。また、学科全体での中間発表会を開いて、課題を共有することにつながった。【根拠資料】 6

[改善すべき事項]

・2016年度と同様に、第2学年に課した夏期休暇中の課題について、提出されたレポートを添削して返却したクラスとそうでないクラスとがあった。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

- 1、学生レポート① 演習Ⅰ「六角堂の説明」（親鸞の旧跡を訪れてのレポート）
- 2、学生レポート② 演習Ⅰ「新入生歓迎講演会の感想」
- 3、「第2学年 夏期休暇 課題について」
- 4、『2017年度学長裁量経費による教育改革事業成果報告書』
- 5、演習Ⅲ「達成状況報告」
- 6、演習Ⅳ「達成状況報告」

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

学年ごとに適切な段階を設けつつ、授業内レポートからフィールドワーク、卒論後の指導に至るまで継続性のある細かな取り組みを設定して「読み、考え、書く力」を養う指導は高く評価できる。演習Ⅱのフィールドワーク中止は残念だが、天候によるものでやむをえない。他方、「ターミナルケアの現場を尋ねる」は現代社会の諸問題と取り組む現代臨床コースにとって「考える」という点でも、また「書く」という点でもきわめて有意義であり、他コースの学生にとっても刺激となる取り組みであろう。[点検・評価]の記載にあるレポート添削などは時間を要する作業だが、学生にとって重要なフィードバックであるので今後一層の取り組みを期待する。

<自己評定> S	<相互評定> S
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
第1学年から第2学年への移行時における指導体制の充実	
[達成基準]	
「行動計画」が全て実施できた時に達成とする。	
[行動計画]	
<p>2014年度より開始した本取り組みは、その効果が見られるので、2017年度も、第1学年から第2学年への接続や展開のために、第1学年の「学習計画レポート」を踏まえて第2学年冒頭での面談指導を年度初めに実施する。</p> <p>○第1学年の春休みに、3つの課題（①一年間の学びを振り返る。②学びにおける疑問や課題を整理する。③これからの学習計画を記す。）の「学習計画レポート」（1,000字以上）を課す。</p> <p>○レポートは、第2学年初めのクラス別懇談会時にクラス指導教員に提出する。</p> <p>○指導教員は、提出されたレポートを踏まえて、学生に対する面談指導をオリエンテーション期間中に実施する。面談指導に際しては、必要に応じて第1学年の指導教員と連絡を取り、学生の実情を把握した上での学生指導を心がける。</p> <p>○上記の内容を会議において学科全体にも周知する。</p>	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
<p>行動計画は、全クラス共通して全て実施できた。</p> <p>・春期休暇中のレポート課題を学年初めのオリエンテーションにおいて提出。その内容をもとに個人面談を行った。2017年度の第2学年は思想探究コース、現代臨床コース、国際コースに分かれてのはじめての学生である。面談では、学生各自の関心と各コースの特色を踏まえた、きめ細やかな履修指導、学生指導を行った。</p> <p>上記の内容を会議において学科全体にも周知した。</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
<p>学生の課題レポートの内容によると、レポートの作成は、学生自身にとってこれまでの学習を振り返ると共に今後の学習を考える好機となっている。また、そのレポートを踏まえての面談による履修指導は、指導教員にとって学生の実情や関心を把握する良い機会であり、同時に学生と教員との関係作りのきっかけとなり、その後の指導に有効なものとなっている。</p>	
[改善すべき事項]	
特になし。	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
<p>1、春期休暇課題指示のプリント（学生による書き込みあり）</p> <p>2、課題レポート</p>	

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

1年→2年への重要な移行をスムーズにし、2年次以降により適切な指導が行われるように「学びの振り返り→疑問や課題の整理→今後の計画」という整理されたレポート課題を課す試みは、学生・教員の双方にとって1年を振り返る具体的な作業となっており高く評価できる。とりわけ2017年度は新コースの初年度であり、この作業の重要性は際立つ。達成状況についても、レポート内容に基づく実情に合った指導面談等、レポート結果を十分に生かした指導が実施されている。ここまでの効果に基づいていっそうの継続した努力を期待したい。

<自己評定> A	<相互評定> A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
第2学年後半の指導体制の充実	
[達成基準]	
「行動計画」が全て実施できた時に達成とする。	
[行動計画]	
<p>2014年度より開始した本取り組みは、その効果が見られるので、引き続き2017年度も学生が学科および大学における学びを体系的にイメージできるように履修指導をする。</p> <p>○上記の趣旨に則り、第2学年の後半に、第2学年から第3学年に向けての面談指導を実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第3学年以降の履修に関する指導を、第2学年年度初めの面談指導やその際に使用した「学習計画レポート」も踏まえながら、実施する。 ・教員は学生の学習状況を把握する機会とし、学生には入学後の学びを振り返らせる機会とする。 ・第3学年でのゼミ決定や、可能ならば卒論も視野に入れて面談を行なう。 ・第3学年からのゼミに関する情報を提示する。 ・ゼミ担当教員のオフィスアワーを積極的に利用して、相談に行くように促す。 ・第3学年編入の学生の指導については、学年初めのオリエンテーションにおける「指導教員決定及びゼミ懇談会」の際、編入生を対象とした説明の機会を設ける。そのことを通して、ゼミ決定やゼミでの学習に戸惑うことがないように配慮した指導を行う。 <p>○上記の内容を会議において学科全体にも周知する。</p>	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
<p>行動計画は、全クラス（思想探究・現代臨床・国際コース）共通して全て実施できた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特に2017年度の2年生は新教育課程にて学ぶ初めての学生であり、個人面談は教員学生ともコースでの学びを振り返ることのできる良い機会となった。また、面談では2018年度開講されるゼミの情報を提供し、同じコースで継続して学んでいくかの意志確認を行った。変更を希望する学生にはコース変更届の提出を求め、希望するコースを現在担当している教員と面談をするように促した（2017年度1名）。また、思想探究コース（1クラス）は、2018年度2つのゼミが開講されるので、それぞれのゼミの学習内容と選択する際の注意点を詳細に説明した。 ・年度初めのゼミ決定のオリエンテーションの際、編入生に対してゼミについて説明する機会を設けた。 	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
指導教員にとっては、学生の学習状況を把握し、丁寧な指導を行うことができる良い機会となっている。	
[改善すべき事項]	
編入生に対して説明の機会を設けてはいるが、ゼミ決定の当日であるので、検討する時間が十分とは言えない。	

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

1、真宗学科コース変更希望届

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

第3学年でのゼミ決定を控えた重要な時期に、1年次からの継続した状況把握に基づく面談指導を行って学生自身に自らの学びを確認させる作業は、学生教員双方にとってきわめて意義がある。また、場合によってコース変更を認めることは、学生が自コースでの学びを再確認するよい機会を提供するものである。編入生の指導については2018年度には学年初めに説明の機会を設けてフォローされることなので、この点を含めて今後より一層の指導の発展を願う。

<自己評定> S	<相互評定> S
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
2016年度開設・新コースに関わる取り組み	
[達成基準]	
「行動計画」が全て実施できた時に達成とする。	
[行動計画]	
<p>新コース開設を受けて、以下の取り組みを実施する（思想探究・現代臨床・国際、2016年度新入生より適用）。</p> <p>○コース選択に至るまでの指導体制の充実</p> <p>下記の内容を実施することを通して、コース選択に至るまで丁寧な指導を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1学年時に、各コースの趣旨やカリキュラム、また想定される卒業後の進路について学生に周知する。 ・第1学年の後期に各コースの学びに関わる特別講演会を開催する。 ・第1学年の終わりに志望コースと志望理由を記した書面を提出させる。それをもとに指導教員が面談を実施し、志望理由を確認し、必要に応じて適切な助言を行う。指導教員間による協議の上、コースを決定する。 <p>○教育課程の整備について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・演習Ⅱの内容を踏まえ、演習Ⅲの授業内容を確定する。また、演習Ⅳの授業内容について検討を加える。 ・上記の内容を、会議において学科全体にも周知する。 	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
<p>行動計画は全て実施できた。</p> <p>○コース選択に至るまでの指導体制の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2016年度同様、コースの決定にあたっては、行動計画の通り、指導教員が学生一人一人と関わりながら丁寧に指導を行った。 ・演習Ⅰの授業時に、各コースの学びの特色などを説明し、学生にコース選択の意識づけをさせた。特に2017年度は演習Ⅱの授業内容の情報を提供できた。 ・12月5日（火）6限目に特別講演会を実施し、3人の教員がコースの学びに関わる講演をそれぞれ行った。 ・コース希望届（第1希望コース、第2希望コース及びそれぞれの希望理由）の提出を求め、その書面をもとに指導教員が面談を実施した。学生の状況に応じて、複数回面談を実施した（12月～1月中旬）。 ・指導教員間で協議をし、学生の課題・関心や適正などを考慮しコースを決定、学生に周知した（1月下旬）。 <p>○教育課程の整備について</p>	

<ul style="list-style-type: none"> ・演習Ⅱの内容を踏まえて、演習Ⅲの授業内容を確定した。 ・演習Ⅳの授業内容については、小委員会において検討し、2018年度に授業内容を確定させることを確認した
3. 【点検・評価】
[効果が上がっている事項]
<p>コースの選択を通して、2年次以降の学びを意識づけさせることができている。</p> <p>決定したコースに不満を持つ学生がいた2016年度の反省を踏まえて、場合によっては複数回面談を実施し、学生個々人の課題を明確にするとともに意志確認を丁寧に行った。</p>
[改善すべき事項]
特になし。
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること
<ol style="list-style-type: none"> 1、真宗学科コース希望届 2、2018年度真宗学演習Ⅲのシラバス

<相互評価担当者使用欄>
<p><所見></p> <p>種々の案内や特別講演会、志望理由書の作成やそれに基づく複数回の面談等によって、新コースでの学びのイメージを明確に持たせ、学生に自覚的なコース選択をさせていることは高く評価できる。また教育課程についても、演習Ⅱでの『歎異抄』読解を受けて各コースがより専門性の高いテキストへと順を追って進み、Ⅱ→Ⅲ→Ⅳの内容に継続性を持たせる努力がなされている。今後も学生個人のコース選択の意志確認を丁寧に行い、新コースの運営がスムーズに行われることを期待する。</p>

<自己評定> A	<相互評定> A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
2018年度学部改編以降における教育課程の整備	
[達成基準]	
「行動計画」が全て実施できた時に達成とする。	
[行動計画]	
<p>2018年度の学部改編に合わせて、真宗学科の教育課程の整備を以下の通り行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新規開講科目（2018年度新入生必修授業「仏教文献基礎演習」）の授業内容を確定する。 ・新規開講科目（2019年度以降開講）の授業内容について検討を加える。 ・仏教学科教員と連携を図り、真宗・仏教両学科の学生が交流できる教育環境の整備を図るとともに、両学科の教員が責任をもって両学科の学生を教育できる体制について検討を加える。 ・上記の内容を、会議において学科全体にも周知する。 	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
上記の行動計画についての達成状況は、以下の通りである。	
<p>①新規開講科目（2018年度新入生必修授業「仏教文献基礎演習」）の授業内容については仏教学科担当者と検討する場を二度設けた。第一回目は、11月11日(土) 午前10時（尋源館会議室）に行ない、第2回目は12月22日（金）12:10～（会場：小会議室5）であった。この二回の会議とそれ以降のサイボウズ上での検討確認を通して、両学科が協力してシラバスを作成することができた。（根拠資料①「仏教文献基礎演習」シラバスを参照）</p>	
<p>②新規開講科目（2019年度以降開講）の授業内容について検討を加え、フィールドワークの授業が2019年度からはじまることに伴い、フィールドワーク3（国際）の授業内容を決定するために2018年度末に「海外研修」の実施を検討した（根拠資料②）。また、学長裁量経費で行った「ターミナルケアの現場を尋ねる」というテーマのもとでのフィールドワークから、フィールドワーク2（現代臨床）の授業内容を準備するための経験と知見を得ることができた。フィールドワーク1（思想探究）および仏教学科と共通で真仏合同クラスで行う大乘仏教入門については、これからの検討課題であることを確認している。</p>	
<p>③①でも述べたが、2017年度は共通授業のシラバス作成のため、真宗学科の担当教員と仏教学科の担当教員とが連携を図り、真宗・仏教両学科の学生が交流できる合同クラスの授業内容を共有し、協力しながらシラバスを完成することができた。このように両学科の教員が集まる会議やサイボウズ上でのコミュニケーションを通して、両学科の教員が責任をもって両学科の学生を教育できる協力関係の足掛かりを作ることができた。</p>	
<p>④上記の内容を、学科会議あるいは学科連絡会において学科全体にその都度周知した。</p>	

3. 【点検・評価】
[効果が上がっている事項]
<ul style="list-style-type: none"> ・真仏両学科が協力して、シラバスを完成することができた。 ・新規科目である「フィールドワーク（国際）」に関わる準備段階として海外研修の実施に向けた検討を始めることができた。
[改善すべき事項]
特になし。
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること
<ul style="list-style-type: none"> ①2018年度仏教文献基礎演習シラバス ②真宗学科国際コースの北米開教区海外研修（メモ）

<相互評価担当者使用欄>
<p><所見></p> <p>学部改編に合わせた新規科目の開講準備が、他学科との綿密な連携や、新たな「フィールドワーク」の授業の模索といったポイントを押さえつつ、多忙な中での確に実行されている。その中で各コース独自のフィールドワークの準備（ex. 国際コースのための海外研修）や新たな真仏合同クラスでの授業等、今後の検討課題が明確になったことは積極的に評価できる。「ターミナルケアの現場を尋ねる」のような新しい授業の実践は学生の学びにこれまでにない新たな視角を与えるものであり、高く評価したい。</p>

＜自己評定＞ A	＜相互評定＞ A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
演習Ⅰ-Ⅳで日本語表現能力を向上させる方策を検討・実施する。	
[達成基準]	
行動計画の完了をもって達成基準とする。	
[行動計画]	
第1学年は、「日本語表現」の受講指導だけでなく、追跡調査を徹底する。	
第2学年は、レポート評価のための演習Ⅱ用のルーブリックを試作し指導を具体的にする。同ルーブリックは年ごとに改良を重ねることとし、他の学年にも応用していく。	
第3学年は、上記と同様に演習Ⅲ用のルーブリックを試作して指導するほかに、卒業論文中間発表会・梗概発表会に参加させ動機付けを高める。	
第4学年は、卒業論文梗概発表会だけでなく、中間発表会を実施する。	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
① 演習Ⅰではレポートの添削をおこなった。	
② ルーブリックは作成できなかった。	
③ 卒業論文梗概発表会は実施できたが、中間発表会はできなかった。	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
① 演習Ⅰで「日本語表現」の受講指導と追跡調査はできた。	
② 演習Ⅱ、Ⅲ、Ⅳでは学生は卒業論文のテーマで発表し、各学年とも年度初めの4月と終わりの1月とを比べると学生の発表時間が長くなり、内容も深くなっているため、表現力は向上していると判断できる。	
[改善すべき事項]	
① ルーブリックの試作はできなかったため、2018年度は簡単なものを作成する。	
② 中間発表会を実施できなかったため、2018年度は実施する。	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	

＜相互評価担当者使用欄＞

＜所見＞

目標に掲げられた日本語表現能力向上は、日本語運用による思考力の向上と表裏をなし、各学科共通の重要課題かと思う。ゼミと「日本語表現」の連携は有効な試みであるし、レポート添削も同様と思われる。同目標との関連でルーブリック作成は本当に必要か、必要とすればどのようなルーブリックかは検討課題であろう。ゼミ横断の梗概発表会は実施されているので、さらに中間発表会が要るかも、時々学年の状況に応じて検討すべき課題といったところであろう。

＜自己評定＞ A	＜相互評定＞ A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
志願者増に向けての広報活動の強化	
[達成基準]	
行動計画の完了をもって達成基準とする。	
[行動計画]	
<p>① 入学センターと緊密に連絡を取り、学科関係教員による計画的な高校訪問を実施する。その際、「高校生のための仏教講座」「仏教学科映画上映会」等の広報啓発活動を計画し、当面の話題作りとPRに役立てる。</p> <p>② 宗門・宗門外の寺院子弟を仏教学科に導くための方策を検討・実施する。</p> <p>③ ①②は学科全体の課題であるが、主たる担当者を決めて確実に実施できるようにする。</p>	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
<p>① 高校訪問は実施できなかった。</p> <p>② オープンキャンパス前日に高校生のための仏教講座を行った。</p> <p>③ 教務所と他宗門へは訪問できた。</p> <p>④ 仏教学科への志願者数は2016年度320人から378人へと増加し、入学者数は2016年度20人から47人へと増加した。</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
<p>高校生のための仏教講座には、本学仏教学科第一志望の学生が毎年参加しており、入学までの動機付けになっている。</p>	
[改善すべき事項]	
<p>映画上映ができなかった。担当者を決めて、確実に実行する。</p>	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
<p>「高校生のための仏教講座」チラシ</p>	

＜相互評価担当者使用欄＞

＜所見＞

ともかく志願者(特に本学内での第一志望)が増加して良かったと思う。仏教講座や教務所訪問等の試みが、志願増にどの程度効果があったのかは、入学センター等と学科で分析される事柄であろう。志願者増と関連は別として、高校生向きの講座、映画上映は学内外の者に仏教を身近なものにする効果があると思われる。

<自己評定> A	<相互評定> A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
卒業論文指導を中心とした演習Ⅳを構築する。	
[達成基準]	
行動計画の完了をもって達成基準とする。	
[行動計画]	
<p>① 2016年度の反省（学生が少なすぎるのも逆効果である）に基づきゼミの数を半減した。それが負担増と出るか、欠点の補正となるか、定期的に学科内の意見交換を持つ。</p> <p>② 新4学年生の論文提出率が100%となるよう、定期的に学科内の意見交換を持つ。</p> <p>③ 長欠学生を指導教員のみの問題としないよう、学科全体の意思疎通を図る。</p>	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
<p>① 少人数ゼミによる細かい卒業論文作成指導を行った。</p> <p>② 卒業論文梗概発表会を行った。</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
<p>① 一人ずつ丁寧な卒業論文作成指導を行うことにより、論文提出率は向上している。</p> <p>② 卒業論文梗概発表会には全学年から学生が参加しており、学生の卒業論文執筆意欲が向上している。</p>	
[改善すべき事項]	
入学試験を通して学生を受け入れている以上、卒業論文提出率は100パーセントでなければならないが、現状は85.7パーセント（21人中18人提出）であり、さらに改善の余地がある。	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

ここ数年、仏教学科の学生数は学年によってかなり変動している。学年ごとのゼミ教員配分、1ゼミの人数設定とも模索の状況であろうと拝察する。梗概発表会や長欠学生の情報共有を、学科全体でおこなうのは、少人数の学科であることの特徴を生かした手であると思う。

＜自己評定＞ S	＜相互評定＞ S
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
新カリキュラムに対応した演習Ⅰの教科書の作成	
[達成基準]	
行動計画の完了をもって達成基準とする。	
[行動計画]	
2018年度からの新カリキュラムでは、第1学年の主要な授業が、「仏教学演習Ⅰ」「仏教学概論」「仏教文献基礎演習」「人間学Ⅰ」となり、「演習Ⅰ」と「概論」（入門的な授業に変更）の内容的な切り分けが必要となる。そこで「概論」は講義型、「演習Ⅰ」は学生参加型の授業とする。そのために必要な学科独自の「演習Ⅰ」のための学科独自の教科書を作成する。なお、計画実行にあたっては中心となる人物を決めて実施する。	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
2018年4月からの使用に向けて、第1学年用の教科書を作成した。	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
演習Ⅰで使用する教科書を作成した。	
[改善すべき事項]	
毎年、改良を加えて、よりよい教科書を作成する。	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
「2018年度仏教学演習Ⅰ」教科書	

＜相互評価担当者使用欄＞
＜所見＞
教科書作成は特筆に値する試みと考える。作成手順、運用の工夫、改良過程なども今後報告していただくと、他の学科の教科書作りにも参考になると思われる。

<自己評定> A	<相互評定> A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
<p>(1) 1年次における客観的に読む力、わかりやすく書く力の養成 (1年次修了の学生が、新書で使用される程度の日本語で書かれた哲学的な文章を読むことができる。また、論理的な文章で他者を説得することができる。)</p> <p>(2) 2年次における専門的な日本語文献を読む力、基礎的な英語文献を読む力の養成 (2年次修了の学生が、3年次以降の学びに必要な基礎的能力として、文庫で使用される程度の日本語で書かれた専門的な哲学文献を読むことができる。また、ヨーロッパ語の基礎となる英語で書かれた基礎的な哲学文献を読むことができる。)</p>	
[達成基準]	
<p>(A) 「哲学科演習Ⅰ」(前後期)の成績評価のグレードポイント平均を2.0以上にする。</p> <p>(B) 「哲学科演習Ⅱ」(前後期)の成績評価のグレードポイント平均を2.0以上にする。</p> <p>(※グレードポイントの平均をどの程度にするかについては現時点では目安がない。したがって数値目標をはじめて提示する2017年度については、「妥当とみられる成績を示したもの」と定められたB評価「グレード2」を基準の目安として提示し、2018年度以降に調整を加えたい。)</p>	
[行動計画]	
<p>① 「哲学科演習Ⅰ」において、テキストやディスカッションから理解した内容を数回(前期2回、後期1回)、小レポート等によって文章化させて添削する。また、学期末の定期試験もレポート形式で実施する。</p> <p>② 「哲学科演習Ⅱ」において、コース内容を概観するような日本語文献、英語文献を講読する。</p> <p>③ ①と②を達成するためには、そもそも学生が学びの場に居合わせる必要があるが、従来からの哲学科の傾向として不登校型の学生が多いことから、「哲学科演習Ⅰ」「哲学科演習Ⅱ」において学修に困難を抱える学生を発見し、生活・学修指導を行う。また必要に応じて、指導教員による指導に加えて、保護者や学生相談室との連絡を密にし、多面的な指導を行う。</p>	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
<p><u>行動計画①</u> 各ゼミにおいて、レポート用紙に授業内課題としてテキストの内容やそれについての考察を記した。添削コメントを付けて学生に返却することによって、自分自身の文がどのように読まれるかを確認することができた。担当を決めて発表原稿を作成し、それにもとづいて発表し、ゼミでディスカッションすることも毎回行われていた。</p>	
<p><u>行動計画②</u> 哲学科第2学年の全てコースのゼミにおいて、そのコースに関する英語文献・日本語文献を全員で予習・精読しながら、ディスカッションした。</p>	
<p><u>行動計画③</u> 行動計画①と②を実践するためには、言うまでもなく継続的な学習が不可欠であるが、学科の中には教室内での学習に困難をかかえて欠席がちになる学生も散見される。そのような学生に対して、早めに個別の面談を行い、他の学生との共同学習の可能性を探ったり、場合によっては教室外での別課題を与えて学習継続を促したりした。授業にほとんど出席できない学生に対しては、保護者に連絡して面談をするなどの対策を講じた。なお、「全国父母兄弟懇談会」での面談の機会は、この</p>	

作業の一貫として哲学科教員が利用した。
3. 【点検・評価】
[効果が上がっている事項]
上記の取り組みの結果、2017年度の演習Ⅰ（前後期）のグレードポイント平均値は2.11となり、また演習Ⅱ（前後期）の平均値は2.28となり、設定した達成基準を上回り、目標が達成されたといえる。
[改善すべき事項]
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること
演習成績内訳（哲学科）

<相互評価担当者会使用欄>
<p><所見></p> <p>テキスト読解等の理解を小レポートに文章化させ、それを添削することによって、理解度や表現方法を客観化して提示する効果が、総じてアベレージを押し上げていると考えられる。個々の添削作業は、教員の負担となるが、学生に自己の取り組みを意識化させる効果が認められるならば、その意味は大いにあると言える。したがって、「哲学科演習Ⅱ」においても、前期に1回程度の小レポートと添削を実施することを検討していただきたい。それにより、アベレージだけではなく、個々の学生のモチベーションを後押しすることにもつながるのではないかと推測される。</p> <p>行動計画③については、その多少はあるにせよ、他学部他学科においても頭を悩ませる問題である。とくに哲学科の場合は、目標番号②（定着率）及び③（卒論提出率等）とも連動した課題であり、個別の面談や学修指導、保護者や学生相談室との連携など多面的な取り組みについては評価すべき点であると言える。しかし、一方、最終的には個々の学生の主体性や自主性に委ねる他ないことも事実であり、現状の対応では、一定の限界を認めざるを得ない点も指摘できよう。</p>

<自己評定> C	<相互評定> C
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
(1) 初年次における定着率の改善	
[達成基準]	
(A) 2017年度の1年次から2年次進級の際の留年率を、10%より少なくする。 (※2015年度の留年率は22.2%であり2016年度は8.5%と激減したが、2017年度は目標として現実的な数値として10%を想定する。)	
[行動計画]	
<p>①「哲学科演習Ⅰ」における講読、ディスカッション、小レポート等から学生の学修面での問題の有無を把握して、必要に応じて個別指導を行ったり、別課題を課したりする。</p> <p>②できるだけ早い時期(4月・5月)に「哲学科演習Ⅰ」各クラスの全学生と個人面談を行い、学生の生活面での問題を把握して指導を行う。また必要に応じて、保護者や学生相談室との連絡を密にし、多面的な指導を行う。</p> <p>③入学前教育(「自習プログラム」)におけるアンケートや課題提出状況を確認し、大学での学びに不安を抱えている学生や、課題提出状況に問題のある学生を早期に把握し、入学前のスクリーニングの際や「哲学科演習Ⅰ」の授業の際に活用する。</p>	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
<p>行動計画①②③を実施した。初年次教育の一環として、大学での学びになじんでいくタイミングをしっかりとつかまえられるよう、個別のサポートを心がけた。特に留意すべきなのは、欠席が続き始めるときである。その期を逃さず、学生支援課の長期欠席調査なども併用しながら、学生の状況把握に努め、できるだけ本人に連絡をとって面談するように心がけた。</p> <p>その一方で、2017年度の傾向として、学期の最初から欠席を続ける学生が散見されたことが挙げられる。そのために、最も指導を必要とする学生に指導が届かないというケースが少なからずあった。結果的に、留年率は17.4%(在籍者数46名、進級38名、原級留置8名)となった。</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
[改善すべき事項]	
全く出席しない学生の実情を把握し、保証人への連絡などの対策をとること。	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
進級判定資料	

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

入学前教育によって問題のある学生を早期に把握する取り組みや、個別の学修指導・生活面の指導・保護者や学生相談室との連携など、その取り組みについては評価することができる。一方で、この問題は、目標番号①の所見で述べたように、最終的には個々の学生の主体性や自主性に委ねられており、時間外での個別指導や面談などの対応が、限度を越えた教員の負担増とならないように注意すべきである。そして、こうした問題を抱える学生を含めて、学生のモチベーションを後押ししていくためには、個別の学科の枠組みを越えて、全学的な課題として受け止め、相互の情報共有をふまえて対応を模索していく必要があると考えられる。

<自己評定> C	<相互評定> C
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
(1) 卒業年次の留年率の改善、卒業論文提出率の改善	
[達成基準]	
(A) 2017年度の卒業年次の留年率を、2016年度の21.2%より少なくする。	
[行動計画]	
<p>①1年次から4年次にいたる各学期の指導において、常に4年次後半の卒業論文提出を最終目標として意識させ、卒論提出にいたるスケジュール内での自らの立ち位置の自覚を促すようにする。</p> <p>②「哲学科演習Ⅲ」「哲学科演習Ⅳ」各クラスにおいて卒業論文テーマの明確化・文章化を教室や個人研究室にて積極的に指導することに加えて、指導の際に、学生が卒業論文作成に限らず広く学修面での問題を抱えていないかを確認する。</p> <p>③生活面で問題のある学生には、保護者や学生相談室との連絡を密にし、多面的な指導を行う。</p>	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
<p>行動計画① 折に触れて卒業論文のことを話題にして、実際の論文を紹介したり、実物を回覧したりしながら、文学部哲学科の最終目標がこの卒業論文であることを意識させた。3,4年合同ゼミでは、4年生の卒論研究発表を何度も聞き、3年次から文献収集などの準備をスタートさせた。行動計画②・③については、必要に応じて個別に指導・対応した。</p> <p>同様の取り組みをしてきたここ数年の留年率の推移は、2014年度33.3%、2015年度21.4%、2016年度21.2%であり、順調な改善が見られたが、残念ながら2017年度は31.8%であった。</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
[改善すべき事項]	
卒論への取り組みを促進するとともに、そもそも教室に来られなかったり執筆や資料探索に困難を感じたりする学生への個別サポートを、保護者や学生相談室との連絡を密にしつつ継続的に行う。	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
卒業判定資料	

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

卒論作成のため3・4年合同ゼミによる動機づけや、4年次におけるスケジュール確認を通じた執筆の自覚化をはじめ、個別の学修指導・生活面の指導・保護者や学生相談室との連携など、その取り組みについては評価することができる。一方で、この問題は、目標番号①の所見で述べたように、最終的には個々の学生の主体性や自主性に委ねられており、時間外での個別指導や面談などの対応が、限度を越えた教員の負担増とならないように注意すべきである。そして、こうした問題を抱える学生を含めて、学生のモチベーションを後押ししていくためには、個別の学科の枠組みを越えて、全学的な課題として受け止め、相互の情報共有をふまえて対応を模索していく必要があると考えられる。

<自己評定> A	<相互評定> A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標] 演習ⅠⅡⅢでは社会や文化の現象について考えを深め、分析を行い、その成果を表現する力を育む。	
2016年度に引き続き、さらに受講生の考える力を高めることを目標とする。	
1 第1学年では、身の回りの社会や文化の事象に積極的に関心を示し、能動的に情報を収集し、分析・考察する力を養う。	
2 第2学年では、専門として選択した学問領域の視点と方法論の基礎を、文献講読などによって修得し、基本概念を用いて、研究対象の事象を分析する力を養う。	
3 第3学年では、自らの研究テーマを絞り込み、専門の理論や方法論を用いて研究し、その成果を演習の他の受講生との討議などを通し共有し、互いに知見を深める力を養う。そして論理的にそれを記述することができる力を身につける。	
[達成基準]	
1 第1学年では、社会や文化の事象に関する新書レベルの文献に親しむ機会を設ける。達成基準は、以下の通りである。授業に積極的に参加し、文献のおよその内容を理解・分析し、考察を深め、そこからさらなる勉学の必要性を自覚すること。	
2 第2学年では、授業に積極的に参加し、選択した学問領域の専門的な基礎概念や方法論を修得し、それを用いて口頭発表やレポートの作成が可能であること。	
3 第3学年では、自らの課題に関する資料を収集・分析できること、演習での口頭発表、それに対するフィードバックを積み重ねることで考察を深めることができること、学問的な視点と方法論を駆使しレポートを作成できること、これらが達成基準である。	
[行動計画]	
1 演習の人数を15人前後として、個々の学生の学問への姿勢や状況を把握しながら、演習を運営する。	
2 授業の中での講読や文献収集のみならず、授業外での文献収集や講読、文献の分析、口頭発表の準備、レポート作成を奨励する。	
3 現代の社会や文化の現象についての興味を喚起するために、講演会やフィールドワークの機会を設ける。講演会のテーマとしては「少年犯罪：その現状と課題」「福島からの広域避難：その現状と課題」などを予定しており、学生の積極的参加を呼びかけることにしている。	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
おおむね達成することができた。	
第1学年では、総合演習・学びの発見・専門の技法それぞれの授業を通して、社会的な課題設定の基礎を具体的に学ぶ機会を幅広く設けた。第2学年では、受講学生が、社会学・地域政策学・社会福祉学の基本概念・基礎知識を習得したうえで、プレゼンテーションとレポート執筆の形で表現する時間を多くとった。第3学年では、各学生の関心にもとづき研究課題を絞り、自主的なデータ収集と分析を行うことを目標とした。また、各自の課題をこなすだけでなく、ゼミの他学生に有意義なコメントを提供する姿勢も深化させた。	
また、社会問題に関する専門家を招き、第1～3学年の演習に組み込む形で聴講・質疑の機会を設定し	

た。

(1)5月21日、福島敦子氏（ジャーナリスト）「地域社会のこれからを考える」：福島氏の基調講演に続いて、地域創生という課題をめぐって、学科教員（志藤、野村）とのディスカッションが行われた。

(2)6月14日、澤上幸子氏（NPO 法人えひめ 311 事務局長）「福島からの広域避難者の現在——避難を通して見えてくるもの」：被災者・避難者が震災後に直面している問題（いじめや風評被害、PTSD 等）をどのように改善していけるか、当事者の立場から現状を説明していただいた。

(3)11月29日、宮地重光氏（京都拘置所所長）「矯正の現状と課題」：超高齢化社会における矯正・更生と再犯防止の問題について、拘置所内の処遇のみならず、社会としてどのように対応していく必要があるか、という点を、豊富なデータとともに解説していただいた。

(4)1月20日、松本一生氏（松本診療所ものわすれクリニック理事長・院長）「認知症についての基礎を学ぶ」：認知症の方やその家族の方への地域としての関わりや支援について、お話いただいた。

3. 【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

- ・受講者数 15 人前後によるゼミクラス運営をほぼ実現することができた。
- ・多様な専門家による講演を聴講することで、社会的な現場における最前線の課題と取り組みを学ぶことができた。
- ・第 2 学年・第 3 学年のゼミでの質疑を通じて、社会科学分野の専門概念や分析手法を応用することで、一見すると社会学的な研究の対象とならないような印象を与えるテーマ（サブカルチャーや国際問題など）も、現代社会に特有のメカニズムや条件と関連づけて考察できるという実感を深めることができた。

[改善すべき事項]

- ・学生個々による、より能動的な調査・研究を促進する余地がある。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

- 4-1. 福島氏講演パンフレット
- 4-2. 澤上氏講演パンフレット
- 4-3. 宮地氏講演パンフレット
- 4-4. 松本氏講演パンフレット

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

演習ⅠⅡⅢ授業で各学年に修得すべき技能について設定された目標を達成するための行動計画として①演習クラスの規模、②演習の授業内容、③講演会とフィールドワークが立案された。①と③は達成、②の学習内容は本来簡単に評価することができないものを含んでいる。全体としておおむね達成されたという評価は妥当であると考え。②の学習内容については、クラスを担当する教員間の、授業や評価方法についての共通理解が必要であるが、今後もこの課題について工夫検討を続けてもらいたい。

<自己評定> A	<相互評定> A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
2016年度の成果に基づき、「就職力」の向上をはかる。	
[達成基準]	
1 アルバイトを含み、仕事に関して調べ、体験し、自らのキャリアについて積極的展望を持ち、行動する力を育てる。	
2 労働における基本的な権利について知る。	
[行動計画]	
1 NPO 法人あったかサポートによる講演会を実施する。	
2 第4学年の学生を演習に招き、就職活動について第3学年の学生と意見交換をする機会を設ける。	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
日程調整がつかず、外部識者による学科主催の講演会は実施しなかったが、各ゼミの中で以下の取り組みを行った。	
・地域政策学コース：第2～3学年48名を対象に、「コミュニティデザイン」や「地域で働く」をテーマにしたミニシンポジウムを実施。地域課題の解決に向けた仕事に携わる行政・金融・社会福祉法人・市民活動団体からゲストスピーカーを招き、卒業後のキャリアを考える機会を設けた。	
・現代社会学コース：第3学年を対象に、第4学年の学生による就職活動体験ヒアリング。また、司法書士の徳武聡子氏を迎え、経済的な問題に関するトピック——「うまい話には注意」「奨学金の返済が難しくなった時」「社会の中の支援資源」——について話してもらった（2018年1月）。	
・第3学年対象のキャリア講座（キャリアセンター主催）の受講を受けて、ゼミにおいて、グループワーク形式を通じた受講者同士による意見交換を実施した。	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
・就職活動を終えた上学年生による具体的な体験談や、コース専攻の特徴に対応する職種・職場から社会人を招いて話を聞くことで、大学における学びと卒業後の進路を具体的につなげて考えるきっかけとなった。	
[改善すべき事項]	
・とくになし	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
授業内における取り組みのため、パンフレットなどはなし	

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

就職力の向上という目標、達成のための行動計画として講演会と学年間の意見交換会の実施。学科主催の講演会は実施されず、コースごとにミニシンポジウム、講演、意見交換など実施。自己評価はAになっているが、そもそも目標とする「就職力の向上」が評価が難しいということがあり、どの程度達成されたかを言うことは難しい。実施者の実感としておおむね達成されたというところを追認する他はない。目標設定及び評価基準について工夫が望まれる。

<自己評定> A	<相互評定> S
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
2016年度の成果をもとに、社会に貢献できる生き方を実践する力を育成するためのアクティブ・ラーニング、PBL（プロジェクトに基づいた学習）型の授業を実施。	
[達成基準]	
アクティブ・ラーニング、PBLのプログラムに向けた授業を各学年で実施し、その成果を報告書としてまとめる。	
[行動計画]	
<p>地域連携室との連携のもと、以下の取り組みを行う。</p> <p>1 現代社会学ではフィールドワークと上級レベルに相当する社会調査を左京区で行うプロジェクト。</p> <p>2-1 地域政策学では祇園祭の間のゴミ減量をめざし、リサイクル食器の使用をすすめる「ゴミゼロ大作戦」。</p> <p>2-2 大学に隣接して開局されたコミュニティ FM によるローカル情報番組の制作と発信「コミュニティラジオ プロジェクト」。</p> <p>2-3 北区の山間地域、中川での地域団体との共同プロジェクト「中川プロジェクト」。</p> <p>2-4 北区の各小学校単位のまちづくりのプランニングをサポートする「まちづくりプランニング サポート プロジェクト」。</p> <p>2-5 南丹市美山の集落住民との交流と生活サポートを考える「美山平屋プロジェクト」。</p> <p>3 社会福祉学では、京都府北部の社会福祉事業者の地域連携事業を学ぶ「京都府北部福祉フィールドワーク」など。</p>	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
<p>2017年度に計画された各プロジェクトについての実施概要は以下の通り。</p> <p>1. 聞き取りによる多世代交流を通じた地域活性化（左京）</p> <p>「社会調査実習Ⅰ・Ⅱ」の授業では、京都市左京西部・東部いきいき市民活動センターの上記事業に地域連携プロジェクトとして参加し、9名の学生（第3学年）が学外での聞き取り調査を行った（2～3名ずつの班に分かれ、各調査対象者につき前期1回、後期2回）。調査対象者は主に昭和初期に生まれた高齢者世代であり、調査結果は①小冊子『わたしたちの家物語り』（いきいき市民活動センター発行）と、②報告書『社会調査実習報告書』（大谷大学文学部社会学科編集・大谷大学地域連携室発行）の二つの成果物にまとめられた。また2018年1月には、パネル展示「わたしたちの家物語り写真展」を、響流館1Fギャラリーで開催した。</p> <p>また、プロジェクトに準ずるものとして「フィールドワークⅠ・Ⅱ」を企画実施した。同授業では、履修学生40名（第2～3学年）が12班に分かれ、主に本学学生を対象にした調査を企画し、聞き取り・観察・アンケートなどの方法を用いてデータ収集し、社会学の視点から分析考察した成果を、学生有志とともに編集し、『アクティブ・ラーニング授業報告第6回「フィールドワーク」成果集』にまとめ、刊行した。</p>	

2. 祇園祭ごみゼロ大作戦

7月15日(土)・16日(日)に祇園祭の宵々山、宵山にて実施された『祇園祭ごみゼロ大作戦2017』に参加。屋台等で使用される食器に、使い捨てではないリユース素材を用いることでごみの削減をめざす活動を行った。参加学生156名、うちボランティアリーダー12名はリーダーとして、事前の打ち合わせや当日の運営に携わり、他大学の学生や社会人と交流するとともに、参加を通じて環境問題の理解を深め、社会活動の現場における多様な課題解決を経験した。

3. 地域の情報発信プロジェクト

地域政策学コース第2～3学年28名で、地域の情報発信を目的に以下の取組みを行った。京都市北区のNPO法人コミュニティラジオ京都と連携し、毎週50分間のラジオ番組「大谷大学 Happy hour!」の制作・運営に取り組んだ(48回放送)。学生は週替わりで運営を担当(パーソナリティ、タイムキーパー、ミキサー)。北区で仕事や地域活動に携わるゲストを招いてお話をうかがう他、大学行事のアナウンス等を行った。大学周辺の地域団体やお店を紹介するウェブサイト「キタキタ!」(<http://kitakita.otani.ac.jp>)を開設。学生が取材、記事作成を担当した。

4. 中川プロジェクト

地域政策学コース第2～3学年18名で中川学区に暮らす高齢者を対象にした「生活実態調査」を実施。暮らしの中での困りごとなどについてヒアリングを行った。またサロン活動の企画運営や地域の祭事などにも参加。地域住民との交流を通して中山間地域の抱える課題の発見、解決に向けた取組みを実施した。

5. まちづくりプランニングサポートプロジェクト

京都市北区鳳徳学区のまちづくりプラン策定プロジェクトに地域政策学コース、社会福祉学コースの第1～3学年10名が参加。参加学生は、全3回のワークショップでのファシリテーター、ワークショップの様子を記録したニュースレターの作成、その他地域役員との企画会議等に参加し、住民主体のまちづくりの進め方を学んだ。

6. 美山平屋プロジェクト

地域政策学コース、社会福祉学コースの第2～3学年20名が1泊2日でのプロジェクトに参加。集落住民との交流サロンや、個別訪問による生活実態調査を通して、少子高齢の進む過疎地での生活支援のあり方について学んだ。

7. 京都府北部フィールドワーク

社会福祉学コース、地域政策学コースの第2～4学年8名が2泊3日のフィールドワーク実習に参加。地域での生活支援事業に取り組む社会福祉法人の取組みを中心に、行政、医療機関、まちづくりNPOとの連携事業の実態や課題等について学んだ。

3. 【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

・学外での調査を行うフィールドワークでは、主体的に課題を設定し、学内外で聞き取り協力をお願い

<p>いする過程を通じて人々とのかかわり方の倫理やスキルを学ぶことができた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアを含めたさまざまな学外調査によって、地域・社会の特色・課題・問題等、幅広く理解する体験ができています。
<p>[改善すべき事項]</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・グループワークの形で調査を実施する場合、積極的でないメンバーが出てくることがある。各自の課題をより明確化させ、自覚をもってもらう必要がある。
<p>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</p>
<p>1-1a. 「わたしたちの家物語」写真展資料、社会調査実習報告書（3月中旬発行予定）</p> <p>1-1b. アクティブラーニング授業報告「フィールドワーク」成果集（3月中旬発行予定）</p> <p>2-2. じんげん asile2017 秋冬号 p8</p>

<p><相互評価担当者使用欄></p>
<p><所見></p> <p>社会に貢献できる生き方を育成するためのアクティブラーニング、プロジェクトに基づいた学習型の授業の実施という目的に対し、行動計画として計7項目の取り組みを設定。その実施と成果の報告書が完成した。目的に対する行動が達成されており、評価はSとすべき。出てきた課題は2018年度の計画に、解決に向けた取り組みを加えるというかたちで解決されるべきだが、2018年度計画には書きこまれていないようである。</p>

<自己評定> A	<相互評定> B
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
<p>演習Ⅰでは、学生が歴史への関心を深めつつ、世界史的な広い視野を養うとともに、日本を含む東アジアの歴史を専門に学んでいくための基礎知識の修得と、史料読解の基礎力を身につけることを目指す。また、学生が自己の問題意識の深まりを確認し、自分の言葉で表現するよう、文章能力の向上をはかる。</p>	
<p>演習Ⅱでは、学生が主体的に選択した自己のコースにおいて、専門的な知識を修得していくとともに、専門書・学術論文など参考文献の精読と内容の把握、及び資史料の収集・整理・分析を通じて、自分なりの歴史像を構築していくための基礎的な作法や手段を身につけ、あわせてその成果を、歴史用語を的確に用いて記述できるよう文章能力の向上をはかる。</p>	
[達成基準]	
<p>学生が入学時にもっている歴史に対する知識と関心は、範囲が狭く、かつ限られた角度からのものであることが多い。演習Ⅰを通じて、幅広く基礎知識を修得するとともに、歴史事象を世界史的な関連の中で把握することを通じて、広い視野と多角的な関心を身につける。また、初歩的な史料読解をおこない、史料の重要性を理解する。</p>	
<p>演習Ⅱでは、演習Ⅰで身につけた広い視野と基礎知識を踏まえて、さらに各コースにおける専門的な知識を修得するとともに、参考文献の内容把握と史料の読解をもとに自己のテーマについて考察をおこない、その内容を的確にレジュメにまとめて発表できるようになる。また、発表の内容に、発表時の質疑応答により得られた知見を加えて、的確な言葉を用いてレポートを執筆できるようになる。</p>	
[行動計画]	
<p>演習Ⅰでは、プリントを使用して日本史・世界史の基礎事項と漢文訓読の基礎を修得させる。その際、単に事項を説明するだけではなく、事項相互の関連や時代像の把握についての理解が進むように工夫する。また、文章力の向上をはかり、歴史についての関心の深まりを実感する機会として、ある程度の間隔を置いて振り返りレポートを課す。</p>	
<p>演習Ⅱでは、学生がレジュメを作成する際、必要に応じて事前指導を行なう。また、授業時にコメントを付すとともに、状況に応じてレジュメを訂補する作業を課す。そのほか、振り返りレポートまたは中間レポートを課すとともに、定期試験のレポートについても添削指導を行なう。</p>	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
<p>演習Ⅰでは、担当教員（日本史の教員と東洋史の教員が半年ずつ担当）が作成したプリントを中心に授業をおこなった。上記〔達成基準〕欄に記したことと重複するが、現在の第1学年生の多くは、歴史について、やや限られた範囲の知識と、学習意欲は有しているものの、</p> <p>①日本史と比較して世界史の知識に乏しく、そのために世界史の理解力に欠けるのみならず、日本史の事象を世界史的な視野で把握することができない。</p> <p>②史料を講読する際に必須となる漢文の読解力に乏しい。</p> <p>ことが指摘できる。そこで東洋史の教員は、世界史の基礎事項、および世界史と日本史の関連、を理解させることに主眼を置き、日本史の教員は、史料読解の初歩としての漢文の読解を中心に据えて、</p>	

それぞれの目的に沿ったプリントを作成して授業をおこなった。

演習Ⅱでは、すべてのゼミで受講生自身がテーマを設定し、レジュメを作成して授業で発表する形をとっている（一部、史料講読を並行しておこなっているゼミもある）。レジュメ作成の事前指導については、原案提出を義務づけているゼミもあるが、そうでないゼミでも受講生が自発的に担当教員の事前指導を仰ぐ場合が多い。定期試験のレポートについても、ほぼすべてのゼミで添削、またはコメントを付した上で返却している。行動計画に記載されたそのほかの取り組みも、ゼミによって受講生数が異なるなど条件に違いがあるため、具体的な実施方法においてはやや差があるが、おおむね実施されている。

3. 【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

演習Ⅰでは、プリントを使用した世界史の学習や、漢文の習得については、学生により差があることは否めないが、全体として効果が上がっている。たとえば、世界史の事典や参考書を携行してくる学生の姿が見られたり、「漢文は、これまであまり学んだことがなかったが、やってみたら面白かった」という素朴かつ率直な声が寄せられたりしたことが、その具体的な手ごたえとしてあげられる。

演習Ⅱでは、レジュメの作成と発表について、年間を通じて数回繰り返すことで、受講生のほぼ全員が修得するに至っていて、この点でも効果が上がっていると考える。

[改善すべき事項]

演習Ⅰは、現在の授業内容については効果が上がってきていると考えるが、第1学年で修得すべき事柄はあまりに多く、演習Ⅰの時間だけでは達成不可能である。たとえば、世界史についていえば、基礎事項の修得はできても、そこから視野を広げ、世界規模での歴史の大きな動きや、その中での日本史の諸事象の理解にまでは至っていない。この点、第1学年配当の他の諸科目と有機的に組み合わせ、全体として効果が上がるよう、工夫していく必要がある。

演習Ⅱでは、授業の取り組み自体に大きく改善を要することはないと考えるが、一回一回の発表やレポートを単発的なものに終わらせず、継続的に積み重ねていくことができるよう、きめ細かな指導を継続していくことが必要である。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

教育への取り組みに効果が見られ、レジュメを用いた発表とレポート作成を達成基準に掲げた演習Ⅱでは目標が達成されていると思われる。ただし、演習Ⅰについては達成基準が「基礎知識を修得」「広い視野と多角的な関心」「資料の重要性を理解」と抽象的であるため、目標が達成されたかどうかの判断基準と根拠が曖昧である。そのため、演習Ⅰについてはもっと具体的で明確な達成基準を設定することが望ましい。

<自己評定> A	<相互評定> A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
卒業論文執筆に向けての個別指導の推進。 「ゼミ」を大学での学びの要（かなめ）と位置づけ、発表や討議、レポートの執筆を通じて、学生一人一人が、自己の関心にもとづいて課題を設定し、参考文献と史・資料を読み解いて課題を検討し、その内容を的確に表現する能力を身につける。	
[達成基準]	
卒業論文提出率を 90 パーセント以上とする。	
[行動計画]	
<ol style="list-style-type: none"> 1 「ゼミ」と講義や実践研究を関連づけて受講するよう、履修指導を徹底する。具体的には、各ゼミにおいて各自のテーマに対応した講義・実践研究を例示し、その受講を確認する。 2 オフィスアワーの活用のほか、全ゼミ生を対象に、個人面談方式による個々の学生に合わせた指導を行なう。前期・後期それぞれ少なくとも1回ずつの個人面談を実施する。 3 レジюмеやレポート作成について個別指導を実施するとともに、レジюмеへのコメントの付与、レポート添削などの事後指導を行なう。 4 長期休暇中に課題を課すことにより、「ゼミ」の取り組みへの関心を持続させる。 5 心身の不調で大学に来られない学生について、学生支援課や保健室・学生相談室などと連携して対応を検討していく。 	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
行動計画の1については、たとえば年度初めのオリエンテーションにおいて、プリントを配布して当該コースで推奨する講義・実践研究の科目を例示したり、第1回目の授業で、時間割の作成について助言を与えたりして、履修指導をおこなった。2については、多くのゼミで年に数回、個人面談の機会を持っている。3・4についても各ゼミで取り組まれている。5についても、指導教員と学生支援課とで連携を取ったり、それぞれの立場から連絡をしたり、相談に乗ったりする体制を整えている。	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
行動計画の1については、徐々にではあるが、意識して講義や実践研究を選択する学生が増えてきていると感じる。そのようにして科目を選択した学生は、授業でもきちんと予習してくるなど、意欲的に取り組む傾向がある。2・3も毎年継続的におこなっており、授業に出席する学生は、ほぼ全員が卒業論文の完成に至っている。学術的に水準の高いものは、学科編集の学術誌『大谷大学史学論究』に卒業論文抄録として掲載することになっているが、基準となる水準を満たす論文が毎年必ず数本は生まれている。	
[改善すべき事項]	
<p>学科には受講生数が非常に多いゼミがあり、そのようなゼミでは、特に行動計画の2にあげた個人面談が時間的に不可能な状況にあり、学生数の適正化が課題である。</p> <p>また5は、体制は整えていると考えるが、大学から（教員からであれ学生支援課からであれ）連絡</p>	

しても応答がない場合も多く、それ以上具体的な対策は取れないのが現状である。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

卒業論文提出率 90%以上という目標の達成により、卒業論文完成に向けての指導の効果が上がったことが分かる。取り組みの結果、提出率が数値としてどれほど向上したのかが記述されていればさらによかったと思われる。

<自己評定> A	<相互評定> A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標] 「読解と論述」を重視する「演習Ⅰ～Ⅲ」	
文献（作品）の読解と、自らの見解の論述を通じて、文学研究における基本的な知識・方法を身につけさせる。	
[達成基準]	
1. 学生に講義を正確に理解させ、その内容を適切にまとめさせる。 2. 学生に文献（作品）を正確に読み取らせ、その内容を適切な文章で表現させる。	
[行動計画]	
授業方法	
1. 文献（作品）の読解および論述の方法に関する基礎知識の修得。 講義によって、上記の理解と記憶を促す。 2. 文学科4コースそれぞれの具体的な文献（作品）解釈の技能の涵養。 学生に担当部分について調べさせ、発表させることによって、上記の力量を養う。 3. 1・2を踏まえて自らの見解を論述する実践。 追加の調査・考察を含めてレポートを書かせる。	
授業計画	
1. 文学研究の意義を学ぶ。 2. 取りあげる文献（作品）の概要および解釈上の留意事項を把握する。 3. 対象文献（作品）を精読し、読解上の必須知識を得る。 4. 読解内容の要約、解釈上の見解・所感を、適切に論述する。 5. 作成した論述文の講評を踏まえ、読解の深化を図る。 6. 文献（作品）の魅力を探り、参照・参考文献の必要性を理解する。 1～6を振り返り、レポートを作成する。	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
<p>・文献（作品）を正確に読解する方法を身につけ、それをさらに習熟させるため、「あらすじ」をまとめる、一般的な読み筋を辿るのではなくあえて「別の観点」から全体把握を試みる、内容・表現・イメージ等の点で特殊な箇所注目してそこから作品の特性を抽出する、等々多角的な「読み」の涵養がなされた。</p> <p>・論述の方法を修得するためには、定評ある先行研究の精読や要約、複数の論文の比較検討、それに対する自分自身の意見や感想、等々を発表やレポートの課題とし、実践的な技術の向上を図った。</p> <p>第1学年のコース別レポート提出率は以下の通りである。</p> <p>〈国文学〉1組＝93.9%（31名）、2組＝89.7%（26名）、3組＝80.6%（25名）、4組＝92.9%（26名）</p> <p>〈中国文学〉1組＝88%（28名）、2組＝88%（24名）、3組＝88%（28名）、4組＝93%（26名）</p> <p>〈英文学〉1組＝79.4%（27名）、2組＝86.2%（25名）、3組＝71.9%（23名）、4組＝89.2%（25名）</p>	

<p>〈ドイツ文学〉 1組=78. 1% (25名)、2組=77. 8% (21名)、3組=71. 9% (23名)、4組=92. 9% (26名)</p> <p>・上記2面はおおむね一定の成果を上げていると思われる。</p>
<p>3. 【点検・評価】</p>
<p>[効果が上がっている事項]</p> <p>・従来は自分自身の見解と先行研究のそれとを無意識のうちに混同してしまう者が多かったが、その線引きを的確に行える者が増えてきた。また論述の際、自説の主張・自説の根拠・具体例・作品の「あらすじ」・作者の意図等を不用意に接続・融合させてしまう者も多かったが、意識して書き分ける者が増えてきた。</p> <p>・別の観点によって、あるいは意識的なクローズアップによって文学に対峙すると、一見新鮮味の乏しい「定番」の作品からも新たな特性が浮かび上がってくる。その驚きが言葉や文学全体への関心を促進させることも多い。</p> <p>・コース別・クラス別の差違もあり一概にはいえないが、第1学年から第3学年までのレポートを通読すると、読解力や方法論の着実な向上を認めることができると思う。</p>
<p>[改善すべき事項]</p> <p>・個人差が大きいこと。授業の場でも成績評価の際も、能力の差ではなく個性の差として、個人差には対応しなければならない。そうすることが学生の意欲の差の縮小にも繋がると考える。</p> <p>・レポート提出率のクラスによる差違については具体的な改善の余地があると思われる。</p>
<p>4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること</p>
<p>・演習Ⅰ 学生レポート (国文学)</p> <p>・演習Ⅱ 学生レポート (英文学・ドイツ文学)</p> <p>・演習Ⅲ 学生レポート (国文学)</p>

<p><相互評価担当者使用欄></p>
<p><所見></p> <p>文学研究を行う際の基礎的トレーニングがしっかりと行われていると認められる。一つの作品を「別の観点」から読むなど、多角的な解釈力の育成に取り組んでいることが根拠資料からも伺える。また第1学年から第3学年までのレポートでは、着実な向上が認められると記載されているが、このような成果も第1学年からの取り組みの結果と考えられる。文学教育のアカデミックな水準を保持すべく努力されている跡がうかがえる。ただし[改善すべき事項]にも記載されているように、一部提出率が低いクラスがある (70%台)。今後の改善点とされたい。</p>

<自己評定> A	<相互評定> A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標] 学生のケア	
第1・第2学年の長期欠席者および問題を抱えた学生への対応の検討と、持続的ケアの実施	
[達成基準]	
行動計画がすべて実行できたことをもって、達成と判断。	
[行動計画]	
<p>1. 第1学年：授業担当者および担任が緊密に連絡を取り、長期欠席に至ると思われる学生、あるいは精神的問題を有する学生がいないか、気をつける。その目的のため2014年度より実施している第1学年の学生と担任との面談を2017年度も行う。また、クラス別懇談会や学生支援課主催の「新入生クラス別茶話会」も同じ目的意識のもとに取り組む。</p> <p>2. 上記の如き学生が見出された場合は、速やかに聞き取りなどを通し適切な対応を行う。</p> <p>3. 第2学年：第1学年時の記録をもとに、授業担当者および担任が見守りとケアを行う。演習Ⅱは各コースに分かれるので、第3学年進級への橋渡しも兼ねて各コースでも情報を共有する。</p> <p>4. 前後期1回ずつ学生支援課より依頼をうける長期欠席者調査に積極的な情報提供を行うと同時に、この情報を有効利用する。閲覧可能なこの調査表を、学科会議や小委員会の場で活用するとともに、適宜補足・改訂を行い、今後の参考とする。</p>	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
<p>・学生が長期間欠席する理由は多岐にわたり、また登校状況も多様である。たとえば必修科目の演習は欠席つづきだが別の講義科目にはほぼ休まずに出席しているとか、授業には出ないがクラブ・サークル活動には熱心に取り組んでいるとかいう学生は珍しくない。大学や専門分野に対する不適応という根源的問題を抱え込みやすい第1学年の学生に対しては、指導教員の懇切丁寧な対応が不可欠であることはいうまでもない。だが、上記のように学生の長期欠席の理由や状況はさまざまなので、第1学年の指導教員だけでなく学科全体で細やかな目配りを絶やさないことが肝要である。そのような認識に基づいて、特に第1学年の学生に対しては、当該学生が履修する演習以外の科目の担当者も指導教員と情報や問題意識を共有し、連携態勢をとって、学生対応に当たった。第2学年以上の学生に対しても、極力これに準じた措置を講じるよう努めた。</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
<p>・〈第1学年の学生と指導教員が入学後比較的早い時期に個別面談を行う〉ことが慣行としてほぼ定着し、一定の効果を発揮しつつあるように見受けられる。第1学年のクラス別面談率は以下の通りである。</p> <p>1組=92.9%、2組=100%、3組=0%、4組=96.4%</p> <p>(3組については、指導教員が特別な職務についていることから個別面談の公平な実施が難しく、検討の結果、2017年度は一切行わないこととなった。)</p>	
[改善すべき事項]	
<p>・入学当初から登校しない学生は、その後何年か在籍を続けた場合でも順調な大学生活を送ることが</p>	

できずに学校を去ることが多い。保護者も含めた親身な懇談を早めに行い、当該学生に適した現実的な対応策を講じる必要がある。

・第2学年への進級はできたものの第1学年の必修科目の単位をなかなか取得できず、第2学年のまま複数回留年を繰り返す学生がいる。独り暮らしの者も家族と同居する者も、大学での自己の状況を保護者に正確には知らせない場合が多く、なかには成績に関して徹底的な隠蔽工作を行う者もいる。長期欠席者でなくても、留年中の学生には、やはり保護者との連携が随時必要であると思われる。

・第3、4学年の学生の学修状況は実質的にはその指導教員のみが管轄することとなるが、この段階でのケアももっと充実させなくてはならない。卒業論文制作間に休学する者（精神的疾患のため）、家族の看護や介護のため登校できなくなる者、卒業論文は合格したものの他の単位の取得にその後複数年を要してしまう者、等々かなり甚大な問題に直面する学生が多い。だが現状はこうした問題が表面化することは少なく、当該学生と指導教員に負担が集中している。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

2017年度後期 長欠調査結果報告（学科別名簿）

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

学生対応でさまざまな対応策を講じているのみならず、苦勞している様子がうかがえた。担任と授業担当者がチームを組みケアを行っていることや、コースや学科で情報共有している実績は、文学科として学生指導を重視している姿勢が伺える。学生の不登校はさまざまな理由があり、教員側の対応が難しいだけに、このような連携体制を今後も継続されることを望む。

ただし1点だけ要望を述べれば、第1学年3組の面談率が0%である点は改善が望まれる。もちろん近年大学教員の業務が多忙になり、一人の教員に過重な負担をかけることが問題であることは評定者も十分承知している。しかし他の学生と同じ学費を支出している学生・保護者からみれば、自分のクラスのみ面談がないのは不公平感を持つ可能性がある。代理者による面接等の対応策を練られることが望まれる。

<自己評定> A	<相互評定> A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標] 「文藝塾」運営の発展	
2016年度に達成した「文藝塾」行動計画の質を高めるとともに、2015年度以来の事業を継続・発展させる。	
[達成基準]	
行動計画の実現	
[行動計画]	
<ul style="list-style-type: none"> ・2015年度より開講している「文藝塾講義」の発展的継続（方法の改善） ・2015年度より実施している「個別面談」の継続（方法の改善） ・2016年度より開講した「文藝塾演習」の発展的継続（方法の改善） ・2018年度の新体制発足に備えて文学科「現代文芸コース」との連携のとり方を検討する 	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
<ul style="list-style-type: none"> ・「文藝塾講義」の安定した実施と授業の充実を図るため、外部講師との連絡・連携を密にし、講義の内容によっては事前または事後に担当教員による補足講義や補足演習を行った（「校正」作業など）。 ・「文藝塾演習」の一層の充実と履修者への丁寧な対応を図るため、履修者1人ひとりに細やかな指導や助言ができるよう、また学生側が教員に相談をしやすいよう、授業体制を整備した（初年度は1名の教員による単独クラスだったものを、2名の教員による2つの少人数クラスとした）。 	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
<ul style="list-style-type: none"> ・読み書きが好きな学生またはマスコミに関心を持っている学生でも、雑誌の編集や校正といった仕事の内容を知悉している者は少ない。学生たちは「文藝塾講義」で実際に活動している方々の話を聞いたり、その仕事の一部を体験してみたりすることによって、憧れの仕事の現実的・具体的な部分に僅かながら接することができ、自らの適性や将来の進路について多角的に考えることができるようになりつつある。 ・「文藝塾演習」で与えられた課題にそれまでの書き方では対応できず、そのため何篇もの小説を参照したり自作を何度も書き直したりしているうちに、自分でも意識していなかった潜在的な能力が引き出されることがある。そういう経験を経た学生は、創作のみならず文学研究においても、新たな段階に進んだといえる。ここでいう課題とは、題材や主題ばかりでなく、作品の語り・構成・長さなども含んでいる（「長い作品」を書くことができるかどうかという能力の差は、多くのジャンルにおいて決定的である）。 ・「文藝塾演習」では相互批評を授業の必須の要素と位置づけているが、それが学生同士の感情的対立（しばしば隠微な）を惹起しがちであるという問題があった。創作と批評を匿名で実施することにより、この問題はいくぶん緩和された。 ・文藝塾で小説を書きはじめた三木将彦氏（2016年度卒業生）が、2017年11月、新潮社のファンタジーノベル大賞を受賞した（受賞作『隣のずこずこ』、筆名「柿村将彦」）。 	

[改善すべき事項]

・「文藝塾」の理念と授業の内容を全学部・全学年に周知する必要がある。

2017年度は複数の学生が「文藝塾演習」の授業内容を論文指導と誤解して履修登録してしまった。

「文藝塾講義」では外部講師による一般公開の講演なども実施されるので、そのラインナップも広報活動の一環としてあらかじめ学内に明示すべきであると思われる。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

- ・「文藝塾講義」外部講師の講義資料
- ・「文藝塾講義」企画書作成の試み
- ・「文藝塾演習」課題作品
- ・「文藝塾」関連会議の議事録

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

大変画期的かつ斬新な取り組みであり、高く評価する。文学作品の解釈研究のみならず、文学作品の創造・製作にまで教育において行っているのは本学文学科の教育の独自性であり、本学の対外的アピールポイントになると思われる。「編集」や「校正」などは通常の学生では経験できない学習であり、大きな学習成果をもたらすと考えられる。また相互批評における学生相互の感情的対立を緩和するなど、2016年度を踏まえた改善点もみられる。卒業生の受賞などの成果もみられ、今後も継続することが望まれる。

<自己評定> A	<相互評定> A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
<p>「演習Ⅰ」「演習Ⅱ」「演習Ⅲ」の授業を通じて、国際化する世界と社会に関するさまざまな情報や資料を読み解き、自分の言葉でまとめた内容と意見をわかりやすく伝える能力の育成を行う。「演習Ⅰ」では「学びの発見」「専門の技法」をふまえて、基本的な文化の概念や資料の読解・要約、根拠をもとに意見を述べる方法を教える。「演習Ⅱ」ではそれらの知識・技術を、発表の相互批評や議論を経てゼミの地域文化・比較文化研究に応用させる。「演習Ⅲ」では、それをさらに発展させ、問題設定・仮説・論証という定型を踏まえた上で独自の見解を提示させる。</p>	
[達成基準]	
<p>1. 「演習Ⅰ」では、資料の読解・要約、引用を用いた小論文の作成法などのスタディ・スキルを学生が身につけることと、国際文化に関する基本的キーワードについて学生が自分の言葉で説明し意見を述べられること。「演習Ⅱ」では、学生が問題設定・仮説・論証という定型を踏まえたグループあるいは個別での発表を行い、その相互批評や議論を活かしたレポート作成ができること。「演習Ⅲ」では、学生が独自の着眼や問題意識を引用や参考文献など論文作法を守ったレポートの形にまとめられること。</p>	
[行動計画]	
<p>「演習Ⅰ」では、文献や視聴覚資料から要点を書き出す訓練や、コメントシートや要約課題などの提出と添削といった文章のやりとりで読み書きの力を養う。また、相互批評によって自分の作成した文章や発言に客観性をもたせる訓練も行う。書く力は学生によって能力に開きがあるため、早い段階から「書くこと」の苦手な学生への指導が行えるよう、高校までの作文指導や学習についてアンケートを行う。苦手意識を払拭するには、書くことにおいて学生の「良いところ」を見つけることが重要であり、その情報を学科内で共有して次の担当教員にも引き継ぐ。「演習Ⅱ」では各ゼミの分野に即した資料収集のやり方を指導し、資料の読み込み・分析・発表を経てレポートをまとめさせる。その際、期末のレポート以外にもまとめた文章を書かせ、添削を通じて論文作法を身につける訓練を行う。また、とりわけ「演習Ⅲ」以降においては、発表やレポートの相互批評において、研究が単なる調べ学習に陥らないよう注意を促すとともに、「発想の独自性」という観点からもコメントや評価を行うよう指導する。</p>	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
【国際文化演習Ⅰ】	
<p>演習Ⅰでは、以下に述べる点に特に留意し、「学びの発見」「専門の技法」をふまえて、基本的な文化の概念や資料の読解・要約、根拠をもとに意見を述べる方法を学んだ。</p>	
(1) 資料を読み解き、論文を作成するために必要なスタディ・スキルの習得	
<p>序論における様々なタイプの導入文を書かせる等（添付資料①-1）、「学びの発見」「専門の技法」で学んだ小論文の基本的な構成を再確認し、実践する場を設けた。また、『世界の統計』（総務省統計局）に収められた様々なデータを各班で解釈し、課題に対する意見の論拠として用いるミニレポートを提出させるなど（添付資料①-2）、情報を読み解き、根拠をもとに意見を述べる演習を行っ</p>	

た。また、レポートの書き方や発表の仕方についての入門書コピーを配布し、それに基づいて演習を行い（添付資料①-3）、大学で必要なスタディ・スキルの全体像をつかませた。1年の段階で、先輩の卒業論文タイトルコピーを配布し、各分野で可能なテーマや着眼点を学んだ（添付資料①-4）。

(2) 視聴覚資料の活用・国際文化に関する基本的キーワードの考察

授業テーマにかかわるビデオを視聴し、その大意を掴んだ上で、「差別」「多文化社会」といった国際文化に関する基本的キーワードについてコメントシートを書かせるなど（添付資料①-5）、視聴覚資料を活用して学生が自分の言葉で説明し意見を述べる演習を行った。

(3) 教員の添削と学生による相互批評

期末レポートを最終回の前の週に提出させ、学生相互のピア・レビューを実施した（添付資料①-6）。そして最終回には、ピア・レビューの結果とともに教員が添削したレポートを執筆者に返却し、最終提出前の書き直しの参考にできるようにした（添付資料①-7）。

(4) アンケートの実施

（添付資料①-8）

高校までの作文指導や学習についてアンケートを行い、「書くこと」の苦手な学生指導を行うための参考資料とした。

【国際文化演習Ⅱ】

演習Ⅱでは、演習Ⅰで習得したスタディ・スキルをもとにグループや個人で発表を行い、発表の相互批評や議論を活かしたレポート作成を行うことに力点を置いた。実践例としては、ゼミ内または合同ゼミで「移民」といった共通テーマのもと、グループごとにサブテーマを設定し、全グループの発表および質疑応答を行った。質疑応答はその有効度に応じて点数化し、自らの発言の論理性と説得力を学生に意識させるといった工夫をした。議論をふまえたレポート作成ができるよう、学生の反応はコメント・ペーパーの形で翌週には発表グループに届けられた（添付資料①-9）。

また期末レポート以外にもまとまった文章を書かせる試みにおいて、その最も有効な例は文化環境ゼミで実践されたものである。学生はゼミのブログでフィールドワークの成果を発表し、豊富な画像資料を用いつつ、調査地の文化や歴史を伝え、その文化を形成した環境について考察した（添付資料①-10）。

【国際文化演習Ⅲ以降】

研究が単なる調べ学習に陥らないよう、国際文化への考察を実践に結びつける課題に取り組む PBL（京都外国人観光客や暮らしに関して課題を設定し、現状調査を行い、改善策を実施し、提案した改善策について実際に自分達で実施してみる）を行った。課題は「まだ解決されていない」問題であることを条件として、課題設定や見解の独自性をも問い、成果プレゼン大会では、ゼミ内で質疑応答を行うとともに、他分野ゼミ学生や教員に審査員となってもらって相互批評を行い、学びを深めた。（添付資料 11）。この成果をもとにレポートを作成し、更に考察を発展させた。

3. 【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

（効果が上がっている事項）

演習Ⅰ

スタディ・スキルを概説書で確認した上で、注意すべきポイントを絞って書く練習を行い、また相互批評を行って読み手を意識させたことにより、問いの設定の仕方を理解し、発想の仕方を学び、設

定した問いと答えのつながりを意識し、データを分析して答えを自分で導き出し、説得力をもって相手に伝える論理的な構成を持つレポートを目指した文章が書けるようになった。相互批評を行うことで、相手に読んで理解してもらうことを意識した文章が書けるようになった。事前添削を行ったため、提出されたレポートは書式や引用などの形式的な問題点をほぼすべてクリアし、レポートの質的向上を実現することができた。

また、日本語に関するアンケートを行ったことにより、学生が特に「文章のまとめ方」「要約の仕方」への指導を求めていることが把握できたため、2018年度のよりよい授業構成につながった。

演習Ⅱ

演習Ⅰで習得したスタディ・スキルをベースに、多文化共生社会を作っていく上で重要な問題を取り上げたことで、学科の学びと実社会をつなげる考察力を深め、演習Ⅰよりも高度に設定した相互批評により、コミュニケーションをもとに思考を深め、発展させることができた。また、ディスカッションをもとにレポートに取り組んだため、多角的に問題を検証したレポート作成が可能となった。ブログ作成では、演習Ⅰで得たスキルを更に発展させ、不特定多数の読み手を意識する成熟した文章作成が可能になった。

演習Ⅲ

国際文化への考察を実践に結びつける課題に取り組むPBLを行ったことで、読んだ書籍のまとめに終わらないレポート作成ができた。

[改善すべき事項]

学科全体で情報交換を重ね、読み書きの技術を高めていく学科共通の4年間の流れを作ることができれば、個々の取り組みが更に生きるだろう。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

(根拠資料は別添の通り)

添付資料①-1 : 様々な導入文

添付資料①-2 : データの考察

添付資料①-3 : スタディ・スキル概説書

添付資料①-4 : 卒業論文タイトル表

添付資料①-5 : コメントシート

添付資料①-6 : ピア・レビュー

添付資料①-7 : レポートの添削

添付資料①-8 : 日本語についてのアンケート

添付資料①-9 : コメント・ペーパー

添付資料①-10 : 鈴木ゼミブログ

添付資料①-11 : 京都でのフィールドワーク要項・採点表

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの連続性を念頭に置いた取り組みの課題が明確に設定されている。また各演習における実際の取り組みが持つ意味を学生に理解させた上で、個人の取り組みに加え、グループでの調査・ディスカッション・検証・発表を通じて、国際文化の考察に必要とされる多様性の理解、多角的視点の構築を図ろうとしている点、教員と学生との間にとどまらず、学生相互が学びあう取り組みがなされている点が評価できる。【点検・評価】に記載されているように、学科全体での情報交換を重ね、各演習の学修をさらに充実させるとともに、その成果が卒業論文に反映される取り組みを期待する。

<自己評定> C	<相互評定> B
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
学科主催の各種行事や、学科所属教員の学外での活動を大学ホームページや学科オリジナルサイトなどを通じて広く伝えていく。	
[達成基準]	
各種行事について学科全体で計画を立て、一年を通じてある程度体系的な行事展開ができるようにする。それらの活動案内や報告、および教員の学外での活動について、大学ホームページや学科オリジナルサイトで発信する。学科オリジナルサイトへのアクセス数が1日平均100名を超えるようにする。	
[行動計画]	
<ol style="list-style-type: none"> 2017年度初頭に各種行事の大まかな年間計画を立てる。学内で実施する行事だけでなく学外で実施する行事についても学科で情報を共有し、サイトで発信する。 新しい情報発信の媒体として Facebook の活用を検討する。 在学生・卒業生に依頼して留学経験や社会での活動を伝える記事を執筆してもらい、学科オリジナルサイトに掲載する。 	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
<p>学科オリジナルサイトに、語学学習法や異文化理解の重要性について考察した学生の留学体験（添付資料②-1）を投稿、また、三宅伸一郎准教授（当時）企画、国際文化学科主催によるチベット人映画監督ソントルジャ氏作品『陽に灼けた道』上映会が大学ホームページや新聞に掲載（添付資料②-2）されるといった形で国際文化の学びを発信した。また、サイボウズに立ち上げた学科教員専用スレッドにて学内外の行事参加の報告を行い、学びの発信の可能性を考える参考資料とした。</p>	
<p>Facebook の学科ページを仮作成した（添付資料②-3）上で、新しい情報発信の媒体として、Facebook の活用を検討した。Facebook の有効性、個人情報保護などガイドラインの必要性などが議論された。Facebook 利用層を考慮すると、より効果的な SNS を検討すべきではないかとの意見が出され、議論は2018年度に持ち越された。</p>	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
異文化理解や語学の学びを自ら深めていく学生の様子がよく分かる記事により、国際文化を学ぶとはどういうことかについて、より良く読み手に伝えることができた。	
[改善すべき事項]	
<p>2017年度は、紫明祭、チベット映画上映会、優秀卒業論文表彰など、学科の学びを深める行事を積極的に行ったが、学科オリジナルサイトでの報告がほとんどできず、1日平均のアクセス数が前年比で20近く下がってしまった。2018年度は学科行事の計画を立てる際に、合わせて学科サイトの更新頻度や投稿担当教員のローテーション等を議論し、国際文化の学びを発信する有効な場として、更なるサイトの活用を図りたい。</p>	
<p>若年層の利用度が高い SNS は情報伝達面で優れている一方、個人情報の保護面などで解決すべき課題を抱えている。ガイドラインを策定し、留意しながら、より広く学科の学びを伝えていく方策を探</p>	

りたい。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

添付資料②-1：学科サイトの留学体験記事

添付資料②-2：チベット映画上映会新聞記事

添付資料②-3：国際文化学科 Facebook 仮作成ページ

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

【行動計画】に基づく達成状況は、やや不十分ではあるが、学科オリジナルサイトの活用、映画上映会の開催を通して、国際文化の学びを発信するという取り組みが作なされ、一定の成果があがっている点は評価できる。また SNS を活用した新たな情報媒体による発信について模索し、議論を継続しており、2018年度にさらに議論を継続しながら、【点検・評価】に記載の課題の解決に取り組むことを期待する。

<自己評定> B	<相互評定> A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
2018年度以降の新カリキュラムを見据え、これまで各教員が個別に取り組んできた授業実践（体験型授業を含む）を学科内またはコース内で連携させる試みを進める。	
[達成基準]	
欧米文化コースと現代アジアコースのそれぞれにおいて少なくとも1～2回以上、ゼミ・クラスの枠を越えた共同あるいは連携型の授業を行う。その教育成果については年2回以上学科内で点検・共有する機会を持ち、新カリキュラムの設計および学科の教育活動にフィードバックする。	
[行動計画]	
欧米文化コースと現代アジアコースでそれぞれ相談の上、共通テーマに基づくチーム・ティーチング、共同ゼミ発表会、留学報告会、あるいは共同の体験型授業（調理実習・フィールドワーク他）など共同あるいは連携型の授業を試みる。実施後のコメントシートやアンケートによって学生からの評価も得られるようにし、学期末ごとに最低1回ずつ学科内で意見交換と情報共有を行って2018年度以降の新カリキュラムの設計および学科の教育活動にフィードバックする。	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
2017年度は、学科内またはコース内で連携した授業実践を以下の通り行った。	
(1)共同ゼミ発表会	
演習Ⅱの試みとして、後期に欧米文化コースのフランスゼミとドイツゼミの合同ゼミを実施した。「移民」を共通テーマに、それぞれのゼミでグループごとにサブテーマを設定し、合同ゼミ当日に全グループの発表および質疑応答を行った。その反応はコメント・ペーパーの形で翌週には発表グループに届けられた（添付資料③-1）。	
(2)学年を越えたゼミ学生間の協力による紫明祭での展示	
韓国・朝鮮文化ゼミでは、「演習Ⅳ」の第4学年学生が企画立案の中心となり、同ゼミの「演習Ⅱ」「演習Ⅲ」の第2・3学年学生の参加協力を得ながら、紫明祭2017年11月11日・12日(会場1210教室)に展示出展した。本展示は、学内外からの来場者に日常的なゼミの学びを知ってもらう機会として企画されたもので、展示では、「トゥルマギ」「パジチョゴリ」「チマチョゴリ」などの民族衣装の着付け体験、「チャンゴ」「プッ」などの韓国・朝鮮の打楽器についての演奏体験を行った。その他、民俗的な生活道具の展示を行った。また各展示物については会場に展示のキャプションを作成し掲示した。二日間の展示企画に、約150人の来場者があった(添付資料③-2)。	
(3)授業実践の成果を共有	
2017年度より、学科で優秀な卒業論文を表彰する制度を開始した。最優秀賞・優秀賞・奨励賞は学科毎卒業証書授与式で学生氏名と論文タイトルを発表し、表彰した（添付資料③-3）。	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
合同ゼミの実施は学生に好評であり、一日だけの実施ではなく、双方の担当教員による深い議論や	

解説を求める声もあったことから、今後同様の試みを企画するにあたっては、発表を踏まえたさらなる調査や討論の機会を設けることを検討したい。

紫明祭展示は、学年を超えたゼミ学生間の協力、自らの学びが外部の人の目に触れる経験を通じて、学生にとって主体的に学び実践する力を試す貴重な経験となった。

優秀卒業論文表彰は、学生の幅広い知的創造の活動を支援する取り組みとして意義を持つとともに、発表時に他分野の研究課題や多様な視点を知ることで、学生の知的好奇心を刺激し、視野を広げる良い機会となった。分野を越えた横と縦のつながりが、多角的な視点からより深く国際文化を考察する好機になったように思う。

[改善すべき事項]

まずは当初アイディアの出ていた留学報告会を実施することが今後の課題である。また、それぞれの授業実践の連携の試みは、同学年、または学年を越えた更なる広がりを持つことによって意義が深まるだろう。例えば優秀な卒業論文は卒業生だけではなく、これから卒業論文を書く在学生と共有することで、より教育的効果が上がるだろう。連携の試みを更に広げ、新カリキュラムの運営発展により活かせるようにしたい。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

- ・添付資料③－1：コメントシート
- ・添付資料③－2：紫明祭の活動
- ・添付資料③－3：卒業論文表彰時の写真

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

合同ゼミの実施によるコース内の交流、学年全体の交流、他分野との交流を通して、学生が国際文化の多角的な考察力を養う取り組みがなされている点が評価できる。2017年度の取り組みに対する学生の反応は、国際文化の学びに有益なものであることを証左しており、それをふまえて、各教員がそれぞれの授業実践を共有しながら、学科の各コースにおいてさらなる交流をはかり、学科の今後の教育活動を充実させていくことを期待する。

<自己評定> A	<相互評定> S
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
<p>演習 I と演習 II で一貫した指導を実施する。</p> <p>1. 演習 I においては、情報の収集・必要な情報の取捨選択・情報の再構築 前期：他者の話（講義）を聞いて、その内容をノートに取り、レポートで再現できるようにする 後期：文献を読み、その内容をまとめる力を養成する を目標とする。</p> <p>2. 演習 II においては、演習 I の内容をふまえ、他人の調査した結果を自らのものと組み合わせ、他者の前で発表し、また他者の発表内容をレポート等にまとめる力を養成する。</p>	
[達成基準]	
行動計画が全て実施できたときに達成したこととする。	
[行動計画]	
<p>1. 演習 I 前期を通して、学生が以下の項目を主体的に行えるように指導する。</p> <p>(1) iPad 利用に必要な ID やパスワード、個人情報等の登録作業などを通じて、情報セキュリティの重要性を理解させる。</p> <p>(2) iPad の具体的な活用方法について指導する。 次のアプリを例年インストールしており、これらを基本とする。 GoodReader, Keynote, Pages など</p> <p>(3) メモをもとに、用語の意味を「自分がわかるもの」「辞書をひいてわかるもの」「辞書に記載のなかったもの」に分類する。「辞書をひいてわかるもの」や「辞書に記載のなかったもの」に対し、iPad を利用して自分で調査する。</p> <p>(4) メモを取った内容について、指定した様式にてレポートにまとめる。</p> <p>2. 演習 I 後期を通して、学生が以下の項目を主体的に行えるように指導する。</p> <p>(1) 講義をレポートにまとめる。</p> <p>(2) レポート提出期限やフォーマット等、レポート作成に係る重要性を理解させる。</p> <p>(3) 指定したフォーマット等のレポートを期限通りに提出する。</p> <p>3. 演習 II 前・後期を通して、学生に以下を行わせる。</p> <p>(1) iPad 等を利用して発表用の資料あるいは企画書を作成する。</p> <p>(2) プレゼンテーションツールを利用して発表のための準備を行い、それを利用して発表する。</p> <p>(3) 他のグループの発表をレポート等にまとめる。</p>	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
<p>目標の 1 と 2 については、当初計画した内容は基本的に実施し、その結果として各学生にも概ね能力が涵養されたものと判断される。</p>	

3. 【点検・評価】
[効果が上がっている事項]
<p>演習Ⅰについては、講義内容の聞き取りの際の要点認識、およびそのノートテイク技法、並びにレポート執筆における文章構成力など。</p> <p>演習Ⅱについては、自己意見の表明力、相手方の主張の理解能力、自己意見表明時のプレゼンテーションによる表現能力など。</p>
[改善すべき事項]
<p>演習Ⅰについては、レポート執筆時におけるケアレスミスの自己点検習慣の会得、ならびに内容のバランスに応じた文章執筆能力をさらに養成させることが必要であると思量する。</p> <p>演習Ⅱについては、高度な学問テーマや知識に関する理解度や、それらを明確に説明するための論理的な議論経験の体得を目指すことが必要であると思量する。</p>
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること
<p>演習Ⅰの進め方についての学生への配布資料：2017年度茶話会ペーパー.docx</p> <p>演習Ⅱ プレゼン大会(前期)画像：前期プレゼン大会.JPG</p>

<相互評価担当者使用欄>
<p><所見></p> <p>方針に基づいた活動が行われ、演習Ⅱのプレゼン大会などの根拠資料からも理念・目的・教育目標の達成度が極めて高いと判断する。改善すべき事項も、より充実した達成を目指す内容である。</p>

<自己評定> B	<相互評定> B
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
学生本人に対する指導に加え、保証人へ適切なタイミングで適切な情報伝達を行うことにより、各年次における留年率を改善する。	
[達成基準]	
2016年度の留年率を改善（1回生 6.8%、2回生 12.9%、3回生 11.2%、4回生 11.1%）した時に達成したこととする。	
[行動計画]	
(1) 入学式・オリエンテーションおよび全国保護者懇談会において、保証人に人文情報学科の方針や大学での履修方法、成績表の見方などを説明し、学生の現状についてより理解を深める。	
(2) 単位不足、あるいは成績不振の学生あるいは保証人に対して、適宜、演習（ゼミ）担当教員が電話連絡を行い、学習態度の改善に努める。	
①学科会議およびサイボウズ等により、各演習（ゼミ）での成績不振の学生に対する情報交換を行い、面談の必要性等の状況を確認する。	
②学生の状況について、関連する各課と情報交換を行い、連携を強化する。	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
(1) 入学式直後に講堂にて学科主任からご参加いただいた保証人に対し説明した。	
(2) 全国保護者懇談会（本学会場）個別相談において説明した。	
(3) 授業の出席率がよくない学生に対しては、学生支援課とも連携を取り、本人を注意するとともに、必要に応じて保証人への連絡を行い、状況を確認するとともに本人へ注意を依頼した。	
(4) 成績表の説明書についての進捗はない。	
(5) 2018年6月はじめ時点での教務課調査による速報値では、2017年度の人文情報学科留年率は下記のとおりである。（1回生 6.1%、2回生 7.1%、3回生 19.4%、4回生 16.3%）このデータによる限りでは、1～2回生は改善したものの、3～4回生は逆に悪化しているので、完全な達成には至らなかった	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
保証人との電話および面談は、大学の体制として十分なコミュニケーション手段が確立されており、2016年度に引き続き、必要に応じて気軽に相談できる雰囲気を保証人に感じていただいているものと判断する。また、1～2回生の留年率（速報値）が改善したのは、目標①・②の取り組みとも合わせた効果が出たものと認識している。	
[改善すべき事項]	
学内通信手段であるサイボウズ利用の運用面については、今後とも教職員全員が改善を図り、タイミングを逸さないよう円滑な情報共有を進める必要がある。また、3～4回生の留年率（速報値）が悪化したことは深刻に受け止めなければならない。今後は、就学状況だけでなく、平素からの生活状況や将来の目標設定なども指導対象に含めつつ対応していく必要があると考えている。	

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

入学式での保証人への説明原稿：入学式あいさつ.pdf

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

達成基準に示された「2016年度の留年率」の改善について、1～2回生の留年率の改善については評価できるが、また3～4回生の留年率の悪化については原因の分析に基づいた改善策が策定されることが期待される。

<自己評定> B	<相互評定> A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
学科に関連の深い IT パスポート試験等の合格等を明確な目標として設定することにより、学生の学習意欲を喚起し、また目標達成に向かう努力を維持し、「やればできる」という自信を身に付けさせる。	
[達成基準]	
行動計画が全て実施できたときに達成したこととする。	
[行動計画]	
<p>(1) 3 回生は受験必須とした IT パスポート試験の受験対策を実施し、モチベーションの維持と合格率の向上を目指す。また、1、2 回生に対しても 3 回生における目標の一つとしての認識を深める。そのため、演習（ゼミ・クラス）等で受験対策を実施する。</p> <p>(2) タイピング技能の有用性を学生に認識させるためタイピングコンテストを実施する。また、この企画・運営においてはできるだけ多くの学生の参加を得て学科全体として盛り上げることにする。</p> <p>(3) 2015 年度実施したビブリオ・バトルについては再度実施に向けて検討を進める。</p> <p>(4) オープンキャンパス等、学生が企画運営に参画可能なイベントに、学生の積極的な参加を誘導する。</p> <p>(5) 授業内容について、オープンキャンパスなどを通じて「学び紹介」として公開するとともに学科サイトに掲載する。</p> <p>(6) デジタル・ライブラリーコースが行ってきた見学会と図書館周辺活動を引き続き実施する。</p> <p>(7) 卒業論文については学科全体およびゼミ内での「成績優秀者」を決定する。</p> <p>(8) 卒業論文成績優秀者を表彰し、またこれを学科サイトなどに掲載することにより在校生に対するモチベーションの向上を図る。</p>	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
<p>(1) IT パスポート試験受験に関しては、志望する学生は基本的に全員受験させることができた。その結果、合格結果に結びついていない学生についても、その後一部は再チャレンジもしくは別資格試験等へのチャレンジという形でも表れた。結果として、情報分野に関する学習意欲、資格試験への関心、努力の重要性の認識を概ね涵養できたと考えている。</p> <p>(2) タイピングコンテストを、2017 年 5 月 31 日(水)に実施した。学生有志による運営で大会を行い、タイピングを手がかりとした技能習得への意識を高めることができたと考えた。</p> <p>(3) ビブリオバトルについては、実施の検討を進めたが、最終的には 2017 年度の実施は見送った。</p> <p>(4) 2017 年度はオープンキャンパスにおいて本学科の企画は行われていないが、社会学部コミュニティデザイン学科の企画に本学科学生有志の積極的な参加が行われた。</p> <p>(5) デジタルライブラリーコースの見学会は、2017 年度は 3 回（愛荘町立愛知川図書館、和紙倶楽部、京都府立図書館）行った。</p> <p>(6) 学科会議で卒業論文成績優秀者 2 名（ベスト卒論賞・準ベスト卒論賞）を選考し、卒業式（学科ごとの卒業証書授与授与時）において表彰を行った。結果は、学科オリジナルサイトに掲載し、在学生の学習意欲喚起を図った。</p>	

3. 【点検・評価】
[効果が上がっている事項]
IT パスポート試験分野で扱われる情報学関係の各種知識の獲得、資格の重要性の認識、今後も不断に新知識等を吸収しつづけていく努力の重要性の理解など。
[改善すべき事項]
明確な結果として合格者が 3 割弱にとどまった点。また各学生の志望分野や志向に合わせた選択肢の設定の必要性がある。
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること
IT パスポート試験実施スケジュール：3 回生に対する IT パスポート試験実施スケジュール.docx IT パスポート試験正答率レポート：カテゴリ別正答率レポート.pdf タイピングコンテスト画像：タイピングコンテスト 1.jpg
<相互評価担当者使用欄>
<所見>
目標は明確で、方針に基づいた活動や目的・教育目標への取り組みも概ね実施され、学生への効果も根拠資料によっても評価できるので、行動計画を実施継続することによる合格者の増加が期待される。

<自己評定> A	<相互評定> A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
演習Ⅰ・Ⅱにおける「読む」「書く」「話す」「聞く」の充実を、2016年度までと同様に継続的に行い、演習Ⅲ・Ⅳでの取り組みに発展させる。	
[達成基準]	
「行動計画」の①～③がすべて終了したことをもって達成されたと判断する。	
[行動計画]	
演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳにおいて、以下の①～③を行動計画とする。(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの段階性・発展性については後に示す)	
①テキストの要点を読み取り、レジュメにまとめることができるように支援する(読む・書く)。	
②レジュメの内容をわかりやすく伝えたり、質問に答えたりすることができるように支援する(話す)。	
③発表を聞いて感想や意見を述べたり、質問をしたりすることができるように支援する(聞く)。	
演習Ⅰにおいては、教育学・心理学分野における基礎的な文章を対象とする(共通のテキスト作成)。	
演習Ⅱでは、刈谷剛彦『学校って何だろう—教育の社会学入門』(2005)、柏木恵子『子どもが育つ条件—家族心理学から考える—』(2008)を共通のテキストとして、グループで発表箇所を分担し、報告を行う。具体的な行動計画は、演習Ⅰと同じであるが、演習Ⅰよりも発表箇所の分量が多くなり、読解しまとめる力がより高度になる。演習Ⅲにおいては、授業担当者ごとの専門領域に関連した文献を読み、学生各人の卒業論文作成の基礎となる文献を読んでまとめ、報告を行う。演習Ⅳでは、演習Ⅲをふまえて卒業論文作成に向けた文献読解(読む)とレジュメ作成(書く)と報告(話す・聞く)を対象とし、より発展的・専門的な取り組みとする。	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
演習Ⅰでは、授業担当者6名が教育学・心理学における基本的な文献を一つずつの選び、それらをまとめたテキストを作成し、授業に用いた。演習Ⅱでは、上記の二冊を共通のテキストとして使用した。演習Ⅲ・Ⅳでは、授業担当者の専門領域に関連した文献や卒業論文作成の基礎となる文献を用いた。それぞれの授業においては、授業担当者が、年度初めの話し合いにより確認した目標・行動計画を常に意識して授業を行ったため、行動計画の①②③すべてにわたって学生を支援することができた。演習Ⅳでは、文献読解の成果をレジュメ作成へとつないで報告させ、質疑応答を通して質問に答える力・質問する力を鍛えるとともに、卒業論文の書き方についても指導を行った。	
例えば、「①テキストの要点を読み取り、レジュメにまとめることができるように支援する(読む・書く)」については、グループごとに担当発表箇所を決め、発表レジュメが作成できるように支援した。「②レジュメの内容をわかりやすく伝えたり、質問に答えたりすることができるように支援する(話す)」「③発表を聞いて感想や意見を述べたり、質問をしたりすることができるように支援する(聞く)」については、授業内で適宜支援を行った。	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
行動計画の①②③について、学生ほぼ全員が、自分なりに取り組み、一定の効果を上げた。①につ	

いては、演習Ⅰの第1回目の授業で担当教員がレジュメの作成方法と発表の仕方の見本を示し、授業後、最初に報告する班に個別指導を行い、第2回目から学生に発表を課したことで効果が上がった。②③については、報告の仕方や聞く態度・質問の仕方などについて具体的な指導をきめ細かく重ねたことが効果的であった。毎時間の地道な指導により、①～③のすべてに効果が上がったといえる。このように、演習Ⅰでの①～③の取り組みが読む・書く・話す・聞く力の基礎となり、演習Ⅱでより高度な読解・まとめ・報告のスキルを身につけ、演習Ⅲでさらに発展的・専門的なスキルを身につけることが可能となる。こうして演習Ⅳでは、演習Ⅰ～Ⅲで身につけてきた、読む・書く・話す・聞く力を全体的に発展させ、卒業論文を意識した報告を作成し発表を重ねることにより、卒業論文を構成しまとめる思考力へと展開するものと考えられる。

[改善すべき事項]

演習Ⅰ・Ⅱは基本的にグループ発表なので、個別の能力差が表に現れにくいですが、演習Ⅲ・Ⅳでは、個人発表の機会も増える。卒論指導の際に、話す・聞く力に比べ、読む・書く力が弱いことが露呈する者もいる。なるべく演習Ⅰ・Ⅱの段階で、必要に応じて個別指導を入れながら、読む・書く力を鍛えていく必要がある。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

演習Ⅰ前期発表レジュメ、演習Ⅰ後期レポート

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

各学年の演習の授業において読む、書く、話す、聞く、をテーマにしていることは一貫性があり、それによって学生の基礎学力が着実に身につけているようであり評価できる。これからも継続的に実行すべきである。テキストに関しては、常にその時代の学生に適した最新のものを採用すべきであるので、2005年や2008年出版のものがいまでもまだ通用するのか検証が必要である。演習のクラスの学生数が記載されていないのでわからないが、適正人数でのクラス編成が望ましい。

＜自己評定＞ A	＜相互評定＞ A
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
教職志望者のキャリアサポート体制の充実をはかる。	
[達成基準]	
「行動計画」の①～③がすべて終了したことをもって達成されたと判断する。	
[行動計画]	
<p>①保育士資格認定試験の受験サポート</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業や個別指導によるサポートやゼミ担当者による面接指導など <p>②教員採用試験に対するサポート</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初等科教育学習会（1年生・2年生対象）を月1回開催 ・2年生の初等科教職学習会は、教員が講師役となり教科ごとに開催 ・自発的なグループ勉強会のサポート ・2次試験前の直前学習会のサポート ・相談員の先生方と協力し、面接・実技・模擬授業に対応できるようにする <p>③教育職員採用試験に関する情報の共有（教職支援センターと）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学科会議での情報共有 ・情報をもとにしたゼミでの面談・指導 	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
行動計画の①～③のそれぞれについて、以下に達成状況を報告する。	
<p>①保育士資格認定試験の受験サポートについて</p> <p>教育・心理学科の学生の中で保育士資格認定試験を受験する者は少数のため、個別の対応となることが多い。以下に、各先生方の行ったサポートをいくつかあげる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ピアノ弾き歌い実技の事前指導 ・過去問を対象とした指導（個別指導が多いが、「発達心理学（幼）」の授業においても対応） ・図画工作関係における幼児が扱いやすい材料を使っての制作実習指導 <p>②教員採用試験に対するサポートについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初等科教育学習会を1年生、2年生それぞれについて、月一回実施 ・自発的な模擬授業や勉強会が複数行われているため、教室を確保し、指導・助言を行う ・教員採用試験直前に、希望者を対象とした音楽や体育の実技指導を実施 <p>このほか、2014年度から引き続き行われている「教職科目担当教員による希望者を対象とする定期的な勉強会」を通年でを行い、夏休み・春休みにも実施し、充実をはかった。</p> <p>③教育職員採用試験に関する情報の共有(教職支援センターと)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3名の教員が教職支援センターミーティングに参加し、直前講習の受講状況・教採受験状況などの情報を学科会議(教職課程初等部会も兼ねる)で報告 ・「教育・心理学科について（ご案内・ご依頼等）」「教員採用試験結果について」など、サイボウズにて教職支援センターと教育・心理学科の教員が情報を共有 	

- ・1年生、2年生の「教職学習会」における学生への周知とビデオによる記録を教職支援センターと共同で実施
- ・学科教員と教職支援アドバイザーによる直前講習の実施（個人面接・集団面接・集団討議の練習・模擬授業への指導助言など）

3. 【点検・評価】

[効果が上がっている事項]

- ①は、保育士資格認定試験の受験サポートが学科教員の共通認識となり、ゼミ担当学生へのサポートだけではなく、他の学生へのサポートも実施する教員が増えてきている。
- ②は、自発的少人数の勉強会の他に、教員の支援も伴った自発的な勉強会が軌道に乗り、それぞれの希望にあった勉強会が定着した。
- ③は、教職支援センターと様々な情報の共有を行い、支援内容の重複に注意し、学生に不利益にならないような支援体制が整ってきた。

[改善すべき事項]

教職をめざして入学してきたものの、途中で方向転換し、教職以外の道を選択することになった学生に対するキャリアサポートが充分ではない。進路変更した学生に対する指導についても十分な配慮が必要である。

4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること

特になし

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

キャリアサポートは現在の大学では非常に重要になってきている。認定試験や採用試験のサポートに関してはしっかりとされているようである。特に面接に関しては、講習を受けた学生とそうでない学生の差は歴然としており、面接講習の受講は学生にとって非常に大切である。キャリアサポートは入学直後から始めるとより効果的である。教職以外のキャリアサポートに関しては、目標番号③において述べられるので、改善すべき事項としてここで述べる必要はない。

<自己評定> B	<相互評定> B
1. 【2017年度の目標等】	
[目標]	
教職以外の進路を希望する学生に対するキャリアサポート体制の充実をはかる。	
[達成基準]	
行動計画①②の終了をもって達成されたと判断する。	
[行動計画]	
<p>①心理学コースの学生を対象とした進路・就職希望調査、支援内容に関するニーズ調査を行い、キャリアサポートに活かす。</p> <p>②キャリアセンターと連携して、教職以外の進路を希望する学生のキャリアサポートを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キャリアセンターからの情報を、ゼミごとに確実に伝える。 ・キャリアセンターからの情報にそって、学生と面談を行う。 ・面談で得た情報を、キャリアセンターに報告する。 ・学科会議で、学生の情報を共有する。 	
2. 【2017年度の達成状況報告】	
①は、2014年度に実施した「教育・心理学科心理学コース学生の進路等に関するニーズ調査」は、2017年度も実施しなかった。2018年度への課題としたい。	
②は、2016年度に引き続き、	
<ul style="list-style-type: none"> ・キャリアセンターの説明会・受験講習などの情報を、演習Ⅰ～Ⅳの授業時に逐次伝達する。 ・キャリアセンターからの情報に基づき、個人面談を実施したゼミもあった。 	
3. 【点検・評価】	
[効果が上がっている事項]	
②について、キャリアセンターからの連絡を、演習Ⅰ～Ⅳの授業時に逐次紹介し、説明会などに積極的に参加するように促した結果、キャリアセンターの催しに学生が参加するようになってきた。	
[改善すべき事項]	
教員養成を主とする学科であるため、教職をめざす学生に対する対応の充実度に比べると、教職以外の進路を希望する学生に対する対応が不十分である。ゼミの教員が個別対応するだけでなく、学科としての取り組みが必要になる。	
4. 【根拠資料】 資料名を明記し、現物を添付すること	
特になし	

<相互評価担当者使用欄>

<所見>

教職以外でも就職試験に関しては共通部分が多く、特別なことを実施する必要はない。しかし、教職以外のキャリアサポートまで大学が配慮していること事態が、学生にとっては非常に心強いことである。どの進路を目指すにしても、演習で習得された自己表現力があれば十分に可能であるので、授業が就職活動に直結していることを学生に自覚させることは必要である。